The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	インドの聖者ガリーブナワーズ伝
Author(s)	ムンシー・アブドゥル・ハミード・バーハリー; 清水, 毅
Citation	印度民俗研究. 2010, 11, p. 1-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50313
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

インドの聖者ガリーブナワーズ伝

ムンシー・アブドゥル・ハミード・バーハリー作
翻訳　清水　毅（大阪大学言語社会専攻博士後期課程）

【テキスト】Munshī ‘Abd al-Ḥamīd Bihārī,1975?, *Hind al-Walī Gharībnawāz*. Ajmer: Ḥamīdiyah Book Depot

本稿訳は南アジアで最も有力なスーフィー教団であるチシュティー派をもたらしたハージャ・ムイーヌッディーン・ハサン・チシュティー（Khwājah Mu‘īn al-Dīn Ḥasan Chishtī, 1141-1236）のウルドゥー語版の伝記『*Hind al-Walī Gharībnawāz*（インドの聖者ガリーブナワーズ）』の伝記（抄訳）である。

ハージャ・ムイーヌッディーン・ハサン・チシュティーはタイトルにもあるようにガリーブナワーズ（貧しい者を慈しんで下さるお方の意）で知られる南アジアで最も有名な聖者の一人である。この聖者の廟のあるインド北部ラージャスターン(Rājasthān)州アジュメール(Ajmer)では毎年イスラーム暦第7月であるラジャブ(rajab)月1日から6日までウルス（‘urs）と呼ばれる命日祭が盛大に執り行われ、インド全土はもとよりバングラデシュやパキスタンからも大勢の巡礼がやって来る。特にパキスタンからの巡礼にはインド政府がウルスのために発給した特別なヴィザを取得し、護衛付きの巡礼専用車両でやって来る事やコングレスやインド人民党の政府高官が代理人を通じて供物を捧げている事などを新聞が報じている。またウルスに集まって来る大勢の巡礼を見込んで小児マヒの予防接種を呼びかける社会福祉団体等がやって来るなど、如何にこの聖者への信仰が南アジアに深く浸透しているかが伺える。

しかし現代ここまで人々の信仰を集めているイスラーム聖者でありながら彼と同時代に生きた歴史家は彼について何ら言及しておらず、最も近い時代に書かれた言行録にもほとんど記述がない。さらにはその伝記も死後150年以上経ってから書かれるようになった事から彼についての伝承のほとんどは後世の創作と考えられている。今回訳出したのはそうした数多の伝記の継ぎはぎであり、本質的にはそれらと核となる部分は変わらない。そのため、過去の伝記が研究の対象になる事はあってもここで扱ったような現代のテキストはほとんど資料として扱われず、このようなかたちで訳出される事はほとんどなかった。しかし過去の聖者伝の現代語訳は比較的に高価であり、南アジアの庶民が簡単に入手できるものではない。またそもそも一般の人々を対象に書かれている訳ではないので、彼らが実際にどのようなものを読んでいるのかを探るために敢えてこのテキストを訳出した次第である。

このテキストは2005年8月に訳者がダルガー内域にいた、店舗を持たない物売りから10Rs（当時のレートで30円ほど）で入手したものである。発行年月日は序文によれば1975年5月とあるが奥付には改訂済みとあり、装丁も最近のものと見られる

事から正確な発行年月日は特定できない。また発行部数も不明だが同時に入手したヒンディー語版（ウルドゥー語版のものと比べると一部内容がカットされているものの内容は全く同じ。）では2200部となっている他、グジャラート語版やベンガル語版、この本の内容に一部依拠したVCDが販売されてもいることからそれなりの需要がある事は間違いない。内容に関しては伝記の他に後継者のリスト（その命日と埋葬された場所も併記）、奇蹟譚、書簡、言行録、祈祷の文句、開扉章の優れた点、廟の内外にある聖者に関連した建物や場所の紹介と多岐に渡り、聖者の生涯から現世利益を叶える祈祷の文句、ダルガー周辺の名所案内に至るまで信者のさまざまな関心に応えるようなかたちをとっている。本来ならばこれら全てを紹介してこそこのテキストの面白みが伝えられるのではあるが、都合により今回は第1章から15章までの聖者の生涯のみを紹介した。残りの部分の紹介に関してはまたの機会を俟ちたい。

なお注釈のアルファベット表記は極力テキストにある通りの綴りを『ウルドゥー語辞典』［加賀谷 2005］に基づいて転写するものとする。ただし、固有名詞、名詞等でアラビア語やペルシャ語表記にした方が通りがよいと思われるものに関してはウルドゥー語読みで訳してあっても「岩波イスラーム辞典』のアルファベット表記に基づいて転写する。その際転写した語彙の後ろにアラビア語なら〔A〕、ペルシャ語なら〔P〕をそれぞれ注記し区別する。

第1章

御誕生

聖者の中の聖者、ハズラト・ハージャ・ムイーヌッディーン・ハサン・チシュティー・アジュメーリー（彼に神の御慈悲あれかし）はヒジュラ暦537年（西暦1142/1143）にホラーサーン地方[1]の大きな村サンジャル[2]にてお生まれになった。サンジャルという村はカンダハール[3]から北へ一日ほど行ったところにあり、現在もその村は存在する。人々はその村をスィジスターン[4]とも呼んでいる。ハージャ・ブズルグ[5]の御父上の御名前はサイヤド・ギヤースッディーン・ハサンで8世代遡るとハズラト・ムーサー・カーズィム[6]の孫がおられる。御母上の御名前はビービー・ウンム・ル＝ヴァラ、またの名をマーハ・ヌールといい、何世代か遡るとイマーム・ハサン[7]の孫娘がいる。つまり猊下[8]は父方からはフセイン[9]の血を、母方からはハサンの血を受け継ぐサイヤド[10]である。

猊下の御母上、ビービー・ウンム・ル＝ヴァラから伝えられるところによると愛息ムイーヌッディーンを身籠った時から家は恵みで満たされて見えるようになった。私達に敵対している人々が好意を持って接してくるようになり、何度かこの上もなく素晴らしい夢を見るようになった。神が御母上の身体に命を与えてからというもの、真夜中から朝にかけて私のお腹の中から「アッラーの栄光よ、讃えあれ。」、「アッラー以外に神はなし。」と唱える声がして、それが当たり前のようになった。私はこの祝

福された声に酔い痴れるのだった。猊下がお生まれになった時、家中が光に包まれた。

父方の家系図

猊下の父方の家系図は以下の通りである。

ハズラト・ハージャ・ムイーヌッディーン・ハサン・チシュティー
ビン・ハズラト・ハージャ・ギヤースッディーン
ビン・ハズラト・ハージャ・ナジームッディーン・ターヒル
ビン・ハズラト・ハージャ・サイヤド・イブラヒーム
ビン・ハズラト・ハージャ・サイヤド・イドリース
ビン・ハズラト・サイヤド・イマーム・ムーサー・カーズィム
ビン・ハズラト・ハージャ・ジャアファル・サーディク
ビン・ハズラト・ハージャ・ムハンマド・バーキル
ビン・ハズラト・ゼーヌル＝アーヘディーン
サイヤドナー・イマーム・フサイン
アミールル＝モーミニーン・ハズラト・アリー（神よ、その顔にお恵みを）

母方の家系図

ハージャ・サーヒブの御母上の家系図は以下の通りである。

ビービー・ウンム・ル＝ヴァラ
ビント・ハズラト・サイヤド・ダーウード
ビン・ハズラト・アブドゥッラー・ハンバリー
ビン・ハズラト・ザーヒド
ビン・ハズラト・ムハンマド・ムアッリス
ビン・ハズラト・ダーウード
ビン・ハズラト・ムーサー
ビン・ハズラト・サイヤド・アブドゥッラー・マフフィー
ビン・ハズラト・ハサン・ムサンナー
サイヤドナー・イマーム・ハサン
アミールル＝モーミニーン・サイヤドナー・ハズラト・アリー（神よ、その顔に祝福を）

教育と躾

初等教育は家庭で行われた。猊下の御父上は偉大な学者であった。ハージャ・サーヒブは9歳の時にクルアーンを全て憶えてしまわれた。そしてその後サンジャルのあるモスク付属の塾に入学された。猊下はそこで初等教育としてクルアーン解釈学、律法学そしてハディース[11]の教育を受けた。そして僅かの間に猊下は充分な知識を修得された。

第２章

ホラーサーンの簡単な歴史

ハズラト・ガリーブナワーズのお生まれになった時代は大変混乱していた。残酷なタタール人達[12]が殺戮と略奪をあちこちで繰り広げ、平和や安らぎは影もかたちもなかった。この野蛮人達はホラーサーンに攻め入り、スルターン・サンジャル[13]を打ち負かし、あちこちに死体の山が築かれた。一方でタタール人が圧制を敷き、その一方でイスラームの教えに反して残虐な行いを繰り広げていたのが正にこの地域であった。

ホラーサーンのスルターンはとっくに打ち負かされていたのでタタールから来た人々は何の妨害も受ける事なくホラーサーンに入って来た。そしていくつかの都市、例えばウーシュ（マシュハド）[14]、マクダム[15]そしてニーシャープール[16]等を壊滅させた。少年少女達を奴隷や下女にし、全てのモスクを破壊した。罪のない人々の死体の山が積み上がり、多くの偉大な学者が罪もないままに殉教させられた。この時、ハージャ・サーヒブはまだ13歳であった。このような恐ろしい流血を見て猊下の心は揺れた。物心がついて間もない頃にこのような恐ろしい出来事を目の当たりにした。

御父上の他界

ハージャ・サーヒブはまだ14歳の時に、その父親を失い、猊下は父無し子になられた。御父上は遺産として果樹園と粉挽き用の水車をひとつ、猊下に遺された。御父上が亡くなられたほんの数ヶ月後、御母上もこの世を去られた。この厳しい心の痛手から狼狽しきってしまった。かくして我らがハージャはその支えを失ってしまわれた。[17]

この時猊下はまだ15歳であられた。幼少期に両親を失うというのは尋常な事ではない。それでも猊下は耐え忍ばれたものの、現世への執着を失ってしまわれた。猊下はこの世は取るに足らないもので、神を識った時こそが本当の人間の安らぎが得られると確信した。しかし、その道においても道案内たる精神的指導者が必要であった。生活手段は父の遺産として得た果樹園と粉挽きの水車ひとつだった。我らがハージャは苗木の世話をし、水を与え、剪定をし、つまり出来得る限り木々や苗木、葡萄等の果樹園の管理をして自らの生計を立てられておられた。

第３章

人生の新しい転機

ハージャ・サーヒブは初めからダルヴェーシュやスーフィー行者、ファキール達[18]との交わりを非常に望んでおり、彼らを敬愛しておられた。ある日いつものように猊下は御自分の果樹園の木々に水をやっている丁度その時、恍惚となった聖者が何処からかさまよい歩きながらその果樹園に入って来た。この聖者はシャイフ・イブラ

ヒーム・クンドゥーズィーであった。年若い園丁（ハージャ・サーヒブ）の視線がこの神を識る聖者に止まると全ての作業を止め、そちらへ向かうと「ようこそいらっしゃいました。」と出迎えた。そして、その聖者の手に口づけをすると非常に丁重に木陰に座らせた。この時もてなしとして出せるようなものは何もなかったが、葡萄の時期であったので見事な房が実っていた。ハージャ・サーヒブは食べごろの葡萄のひと房をもぎ、この聖者に差し出した。そして見事な所作で正座をして聖者の前に座った。猊下のこの振る舞いを敬虔な聖者はいたく気に入って喜び、いくつかの葡萄を召し上がった。恍惚となった聖者の神を識る眼はこの見どころのある少年が神の道を求める者と直ちに見抜いた。そこで聖者は自分のポケットから油かすのかけらを取り出し、それを噛み砕くとハージャ・サーヒブのお口の中に入れた。我らがハージャは初めからダルヴェーシュやファキール達を敬愛していたのでイブラヒーム・クンドゥーズィーに与えられたそのかけらを食べた、するとどうなったであろう。猊下の心はこの世への執着を失くされた。そして自我の全ての覆いが消え去った。その油かすが喉を通る時、猊下は精神の世界に入ってしまわれた。驚きと興奮が心の中に広がった。両目は開き切っていた。猊下が忘我の状態から戻って来るとそこには誰もいなかった。シャイフ・イブラヒーム・クンドゥーズィーは来た時と同じように滞まる事なく立ち去ってしまった。

シャイフ・イブラヒーム・クンドゥーズィーは立ち去ってしまったが、我らがハージャの見た精神世界の顕現は目に焼き付き、忘れられるようなものではなかった。猊下は何度もそれを見る事を渇望した。可能な限り我慢はしたが、心はとても抑えられるようなものではなかった。愛の炎が燃え上がり、熱狂がこの上もなく高まってくると猊下の目にはこの世とその富がとるに足らないものに見えるようになった。そこで果樹園と水車を売り、手元にあった財産全てを神の道において、貧乏人や生活に困った者に分け与えてしまわれた。そして必要な僅かばかりの旅のための食糧を携えると神を求めて旅立った。

第４章

顕教的諸学の修得

神の想起は知識なしには不可能なので行いの中に間違いや悪いところを残さないように猊下は一番最初に顕教的学問[19]を修得しようとした。母国に別れを告げ、学問の探求のために飛び出した。タタール人達がホラーサーンのマドラサ[20]のほとんどを破壊してしまったので、我らがハージャは学問への渇きを癒すために長い旅をせざるをえなかった。困難な旅路、荒野、川、山々や深い森を越えあらゆる苦難に耐えながら猊下はブハーラー[21]の有名なマドラサにたどり着いた。そしてイスラーム法学やハディース、クルアーンの解釈学や他の合理的な諸学問の本を読んだ。そしてモーラーナー・フサームッディーン・ブハーリーのような誇るべき人達や他のウラマー[22]

達から猊下は学問を修得した。ついにはモーラーナー・フサームッディーンは修了の証となるターバンをお与えになり、当時の有名なウラマーのうちに数えられるほどに宗教的知識で猊下を満たした。しかしそれでも学問への渇きは熄まず、モーラーナー・フサームッディーンに別れを告げるとサマルカンドへ向かわれた。サマルカンド[23]でも宗教的な教育が受けられるマドラサをそれぞれ巡って更に学問を修得した。

第5章

神の探求

シャイフ・イブラヒーム・クンドゥーズィーがハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーに神の愛の煌きをみせたその時より、猊下の心は落ち着きを失った。そして今や、学問の風は愛の炎を更に燃え立たせた。それ故ある日サマルカンドに別れを告げ、神の名を唱えて西へ向かった。西方の地は神を識るスーフィー達の墓廟がいくつもあり、神を識る偉大な聖者が存在した。そこではいたる所に恵みの川が流れていた。サマルカンドから南に延びる一本の道がバルフ[24]へ向かっていた。猊下はその道を通って完全なる師を求めて旅立った。しかし、この旅でも完全なる聖者には出会わなかった。そして猊下は何か不可視の力に引き寄せられるかのように歩き続けた。この時ニーシャープールから少し離れたハールワンの村にたどり着いた。

ハージャ・サーヒブ、完全なる師の御前にて

ハールワンは小さな地方都市ではあったが、神に仕える偉大さを見れば、この小さな都市にも神の慈悲が降り注いでいた。つまり当時そこにはシャイフ・ウスマーン・ハールワニーがお住まいになっていて街中が幸福に満ちていた。ハズラト・シャイフ・ウスマーン・ハールワニーは偉大な聖者のうちのおひとりであった。そして猊下の徳は遥か遠くまで広まっていた。生活に困った者や神を求める者達は望みの宝石で袋を一杯にしてやって来るのだった。

フズール・ガリーブ・ナワーズの愛の感情はついに御自身を目的の場所まで導いた。つまり猊下はハールワンの街に入られた。この時、猊下の喜びはこの上もなかった。何故なら命の水を湛える泉を見つけたからだった。我らがハージャは長い旅をしてハールワンに到着されたので猊下の御尊顔や着衣は埃にまみれていた。猊下は気が急くのはもちろんであったが、お顔には真剣さが見てとれた。ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズはハズラト・ハージャ・シャイフ・ウスマーン・ハールワニーの神を信ずるその手において弟子入りした。そして完全なる師は猊下を自分の弟子のひとりに加えた。ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズが弟子入りした時の事について猊下御自身が語った言葉を挙げる。

私は素晴らしい聖者達の集う中に恭しく姿を現わした。そして忠誠を誓って頭を垂れた。師は指示をされた。

「2ラクア[25]の礼拝をしなさい。」
私は師に従った。また指示をされた。
「キブラ[26]の方へ顔を向けて座りなさい。」
私は敬意を込めてキブラの方へ顔を向けて座った。さらに
「雌牛章[27]を朗誦しなさい。」
私は作法に則って朗誦した。再び指示をされた。
「60回アッラーの栄光に讃えあれ、と唱えなさい。」
私が唱えると再び師は私の手を取って空を見上げこう仰った。
「私はお前を神の下へ送り届けた。」
これら全ての事が終わるとクラーハ・エ・チャハール・トゥルキー[28]と呼ばれる特別のトルコ帽を私の頭に被せ、ガウンを私に着せて下さった。そしてまた仰った。
「座りなさい。」
私は直ちに座った。また指示をされた。
「千回純正章[29]を唱えなさい。」
それが終わるとこう仰った。
「我々の聖者達のところでは一昼夜だけの苦行をする。行って丸一昼夜苦行をしなさい。」
この指示を受けて私はまる一昼夜、行と礼拝をして過ごした。次の日、師の前に行ってその御足に口づけをする栄誉を得た。そしてお言葉に従って座った。
指示をされた。
「どこまで見えるかな？」
私はお答えした。「最高天[30]まで。」
また指示をされた。
「下を見なさい。」
私が下を見ると再び仰った。
「どこまで見えるかな？」
私は言った。「大地の下界[31]まで。」
再び指示をされた。
「千回純正章を唱えなさい。」
私は指示に従った。師は再び指示をされた。
「空を見なさい。」
私は見て申し上げた。偉大なる覆い[32]まではっきりと見えます。
「目を閉じなさい。」私は目を閉じた。
再び指示をされた。
「開きなさい。」
私は目を開けた。
その後師は御自分の二本の指を私の前に出し尋ねられた。
「何が見えるかな？」

私は申し上げた。
「一万八千の世界が私の目の前にあります。」
私がこう申し上げると師は仰った。
「よし、お前は全てを成し遂げた。」
そして目の前にあった煉瓦のようなものを差して仰った。
「手に取りなさい。」
私が手に取ると下から出てきた何枚かの金貨について指示をされた。
「それを持って行きなさい。そして貧乏な人や生活に困っている人に分けて上げなさい。」
そこで私は師の言う通りにした後、師の御前に行った。指示をされた。
「何日か私達のところに滞在しなさい。」
私はお答えした。
「かしこまりました。」

第6章

ハージャ・サーヒブ20年間を導師の下で

ハズラト・ハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーはある時期からハズラト・ハージャ・ウスマーン・ハールワニーの弟子であった。今や旅をしている時も、定住している時も常に師の前にいた。師の寝床、食料、水の袋、そして他の必要な荷物を自らの頭と肩に担いで旅に同行された。ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズは20年の間[33]、師の下で修行した。そしてこの時に霊的認識[34]と真実の全ての段階に到達され、托鉢僧の道の奥義も理解された。自らの師から教訓の盛り込まれた話を聞かれ、驚くべき奇蹟を目撃されたが、その中からいくつかの記述をハージャ・ブズルグ御自身のお言葉で挙げる。

「ある時、私の師であるハズラト・ハージャ・ウスマーン・ハールワニーに同行してスィーウスターン[35]を旅していた。ある日、我々は隠棲所にたどり着いた。そこにはサドルッディーン・アフマド・スィーウスターニーという名の、非常に行に勤しむ行者がおられた。私はその方の下に何日も滞在した。ここに滞在する者は失望して帰る事はなく、猊下は中から何かしら持って来て与えるのであった。そして「私の信仰心が厚いまま、神の下へ安らかに行けるように祈ってくれ。」と仰るのであった。

この行者は墓の中で受ける苦しみ[36]と死の状態について聞いた時に神の畏れによって柳のように震え出し、両目からは血の涙が流れ出し、七日間ずっと泣き続けた。それは見ている者も泣き出すほどであった。私が猊下の下に滞在した時も、まさにその状態で落ち着いた時に私に向かってこう仰った。「親愛なる者よ。死がその前に立ち、死の国が眼前に見える者が眠り、笑い、幸せに過ごして何になるというのだ？」そしてまた仰った。

「もしもお前が地面の下に眠る者やサソリが蠢く部屋に閉じ込められた者の状態を知ったならば、塩が水の中に混じってしまうように溶けてしまうであろう。」その後、話し始めた。

「今日三十年ぶりにお前にこの話を聞かせるがバスラ[37]の墓場で、とある墓のところに私と共にもうひとりの行者が座っていた。この墓の中では死者に罰が下されていた。その行者は神秘的直感力[38]があったので、彼には墓の状態が明らかになった。それを見て大きな叫び声を上げると地面に倒れこんでしまった。私は助け起こそうとしたが、既に魂は肉体から飛び立っていた。そしてみるみるうちに彼の肉体は塩のように溶け、水になって流れ去ってしまった。あの行者に見た恐ろしさは今日まで何者の中にも見もしなければ聞きもしない。」その後、猊下はいつものようにナツメ椰子の実をふたつ与えて別れた。

ある日、ハズラト・ハージャ・ウスマーン・ハールワニーはハージャ・ガリーブナワーズに向かって仰った。「来たる最後の審判の日、預言者や聖者、ムスリムで礼拝の義務を滞る事なく果たした者達はみな逃れ礼拝の規則を守らなかった者は地獄の炎の中に住む事になろう。至高の神はクルアーンの中でこう仰っている。」

نويل للمصلين اذين هم عن صلو تهم ساهون ط

訳：礼拝を怠る者には罰がある。罰とは地獄にある井戸の中にこの上なく痛ましい罰が待っている。礼拝に遅れる者や時間通りに行わない者、罰はこのような者達のためにある。

そして猊下は罰についてこのように説明された。「罪人は七万回偉大で輝かしい神に『このひどい罰はどの人々に下されるものなのでしょうか？』と訴える。『この罰は礼拝を時間通り行わなかった者へのものだ。』と命じられる。

ある時、私と師は旅をしていてチグリス川のほとりにたどり着いたが、川は氾濫していた。私は案じてしまった。師は仰った。

「目を閉じなさい。」しばらくして目を開けると私と師はチグリス川の向こう岸にいた。私は「これはどのように渡ったものでしょう？」と尋ねると、

「“神に讃えあれ”を五回唱える事で渡って来たのだ。」と仰られた。

ある時、私の師ハズラト・ハージャ・ウスマーン・ハールワニーと共に旅をしていた。途中でハージャ・ババーウッディーンに出会った。この方の下にやって来た者は、手ぶらで帰る事がないのが常だった。もし裸同然の者がやって来たら、猊下は御自身の服を与えようとなさるのだった。そんな時天使が素晴らしい服を持ってやって来るのだった。我々は何日かこの方と交わった。別れの時に猊下は教訓をお与えになった。

「神の友人のうちに入れてもらえるようにお前の得たものは何であれ、自分のものにせず神の道において与えてしまいなさい。」

ある時ダルヴェーシュ達の集まりがあり、わが師ハズラト・ハージャ・ウスマーン・ハールワニーの下に集った。この時、老齢に達した男がやって来た。彼は猊下に挨拶

をし、師は立ち上がって挨拶を返し、誠意をこめて座らせた。彼は訴えた。

「息子が私の下からいなくなって30年が経ち、生死も定かではありません。私は息子がいなくなった事で打ちのめされています。どうかお助け下さい。息子が何事もなく戻って来るようにお祈りをして下さい。ハズラトはこの言葉を聞くと瞑想をし、頭を垂れた。そしてしばらくするとその場に居合わせた人々に向かってこう仰った。「この御老人の御子息を取り戻すために開扉章[39]と純正章を唱えなさい。」

そこで開扉章と純正章が唱えられた。その後猊下は老人に向かって仰った。

「お帰りいただいて結構です。あなたの御子息が見つかったらここに連れて来て私に会わせて下さい。」

その老人がまだ帰る途中で「あなたの息子が見つかった。」とひとりの人が知らせにやって来た。家に着いて息子を抱き締めると返す足で息子を連れ師の下へ現われた。ハージャ・ウスマーン・ハールワニーはこの息子に尋ねられた。

「君はどこにいたのかな？」彼は言った。「海に浮かぶ船の上にいました。船長が私を鎖で縛っていたのです。今日ひとりのダルヴェーシュが、猊下とそっくり、いや、あれは猊下御自身がお越しになられました。そして鎖を断ち切り、私の首根っこを力強く掴んで猊下の前に立たせて下さいました。そして『足を私の手の上にのせて、目を閉じなさい。』と仰いました。しばらくすると『目を開けなさい。』と言われました。私が目を開けるとひとりで自分の家の戸口に立っていました。」これだけ言うとさらにもう少し何か言おうとしたが猊下は黙っているようにと念を押した。老人はこれを聞くとハズラトの足元に頭を乗せた。そして父と息子は帰って行った。[40]

ハズラト・ハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーは二十年の間、自らの師ハズラト・ハージャ・ウスマーン・ハールワニーの下にいらした。そして喜んで師の全ての指示に従っていた。猊下のこの必死の奉仕と引き換えにハズラト・シャイフ・ウスマーン・ハールワニーは途方もない恵みをお与えになった。そして霊的認識と真実の全ての段階に導いた後、完全なる師ハズラト・シャイフ・ウスマーン・ハールワニーは自身が偉大な聖者達から得た全てのものを有望な弟子であるハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズにお与えになり、訓示を与えられた。

「ムイーヌッディーンよ！人々に何も望むな。決して街にとどまるな、そして誰にも何も求めるな。」

ハージャ・ガリーブナワーズは仰っている。「この後師は開扉章を唱え、私の頭と両目に口づけをして仰った。『お前を神に委ねた、ムイーヌッディーン。神に愛されし者よ、私はお前が弟子であった事をとても誇りに思っている。』」

第7章

旅と聖者達との出会い

ハージャ・ガリーブナワーズは師であるハズラト・ハージャ・ウスマーン・ハール

ワニーと別れてバグダードへ向かわれた。途中でいろいろな所に滞在しながらヒルカーン[41]に到着された。ヒルカーンはこの時代には小さな街であったが、アブル＝ハサン・ヒルカーニー[42]という聖なる人物がいるために有名であった。そのためハージャ・サーヒブは猊下の尊い御人柄から秘儀的な恩恵を得られた。何日かヒルカーンに滞在された後、猊下はそこから先に進まれた。途中でどこかに神を識る聖者の墓廟があると猊下は滞在され、秘教的な恩恵とバラカ[43]を得られた。

マーズィンダーン[44]の国境の近くにアスタラーバード[45]という有名でよい街があった。猊下がそこに到着された時、シャイフ・ナスィールッディーンがおられた。高い位階の、神を識る聖者であった。この方のスィルスィラ[46]をたった二世代遡るだけでハズラト・シャイフ・バーヤズィード・バスターミー[47]につながっていた。ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズはしばらくの間この方と交わって神の神秘的認識の光を得られていた。その後、猊下はその場を離れイスファハーンに御光来された。この当時イスファハーンは世界のうちでも美しく有名な街のひとつとされていた。この時にイスファハーンでシャイフ・マハムード・イスファハーニーがおられ、我らがハージャは猊下（マハムード・イスファハーニー）とお会いする栄誉を得られた。この出会いも驚くほど趣きに満ちたものであった。

ふたりの同時代の神を識るお方が向かい合って立っておられた。そしてお互いから徳と光の雨が降り注いでいた。

まさにこの時、ハズラト・ハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキー[48]が完全なる師を求めて旅をしながらこちらへやって来られた。そしてイスファハーンに滞在なされたのは神の力の驚異と御理解されたい。猊下（クトゥブッディーン）はよくシャイフ・マハムード・イスファハーニーの下を訪ねておられたのだった。猊下（クトゥブッディーン）はシャイフ・マハムード・イスファハーニーを非常に信頼されていたので猊下に弟子入りしようと考えていた。しかし、神の力は他の何かを意図していた。ある日猊下（クトゥブッディーン）の視線が光が現れるハズラト・ハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーの御尊顔に止まった。するとどうなったであろう。猊下はハズラト・ハージャ・ブズルグに魅せられてしまった。そしてある日折りを見てフズール・ハージャ・ガリーブナワーズの下に現れた。そして願いを打ち明け、猊下の神を信ずる手を取って忠誠を誓い弟子達の中に加わった。

その後ハズラト・ガリーブナワーズはイスファハーンを出発されハマダーン[49]に到着された。そこには当時最も偉大で優れた敬虔な禁欲家ハズラト・シャイフ・ユースフ・ハマダーニーに会う栄誉を得られ、恩恵を得られた。

ハマダーンから猊下は出発されタブリーズ[50]に御光来された。当時タブリーズにはハズラト・シャイフ・アブー・サイード・タブリーズィーがおられ非常に有名だった。そこでフズール・ハージャ・ガリーブナワーズはしばらくそこに滞在し、その誠意溢れる交わりから愉しみを得ていた。その後猊下はバグダードに行かれた。

ハージャ・サーヒブ、バグダードにて

ハマダーンから旅立ってハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズはバグダードに滞在された。バグダードは当時学芸の中心地であった。この上もなく偉大で高い位階を持つ優れたウラマー、スーフィー達、敬虔な者達、神を畏れる者達、そして聖者達がそこにいて、彼らの熱意溢れる集まりは顕教的、秘教的諸学で満ち満ちていた。ハージャ・ガリーブナワーズもこれらの集まりに行って恩恵を得た。バグダードにやって来てフズール・ガリーブナワーズはこの時代の並ぶ者のない律法学者シャイフ・アブー・ナジーブ・スフラワルディー[51]とジャナーブ・ピーランピール・ダストギール・サイヤド・アブドゥル＝カーディル・ジーラーニー[52]は既にこの世を去られていた事を知られた。ハージャ・サーヒブはこの聖者達の光あふれる墓廟に行き、籠って修行をされた。この他にも猊下は他の偉大な聖者達の霊的な墓廟に詣でられて秘教的な恩恵とバラカを得られた。

バグダード・シャリーフでは猊下はその時にバグダード・シャリーフを訪れていたハズラト・シャイフ・オーハドゥッディーン・キルマーニー[53]にも会われた。そして神の神秘的認識[54]の諸段階を辿っておられた。ふたりの聖者はお互いから徳を得られた。

ハージャ・サーヒブ、神の宮廷にて

ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズはヒジュラ暦583年マッカに到着された。そしてカアバ神殿の巡礼[55]という栄誉が与えられ、何度もカアバ神殿の周りをタワーフ[56]し、行に勤しんでおられた。猊下はそこで数え切れないほどの徳とバラカを得られた。ある日の出来事である。ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズはカアバ神殿において行に勤しんでおられると不可視の世界[57]から声が聞こえてきた。

「ムイーヌッディーンよ！余は汝に満足している。汝は赦されたのだ。何なりと心に望むものを求めるがよい。」

ハージャ・サーヒブはこれを聞いて非常に喜んだ。そして恍惚となって倒れこんだ。猊下は神の宮廷にこの上なく恭しく申し上げられた。

「神よ！私のスィルスィラの弟子になる者達をお赦し下さい。」この時声がした。

「ムイーヌッディーンよ！お前の祈りは受け入れられた。最後の審判までお前の汝のスィルスィラに入る者は赦されるだろう。」

ハージャ・サーヒブ、預言者ムハンマドの宮廷にて

マッカから出発されてハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズはマディーナに来られた。そして見事なまでにへりくだって預言者ムハンマドの宮廷に詣でられた。毎日預言者モスク[58]で一日五回の礼拝をし、殆どの時間、聖廟に詣でて祝福し、敬意を表しておられた。ある日の朝、ファジュルの礼拝[59]を終えて預言者モスクにいた全ての人々は聖廟の近くで礼拝や挨拶をして敬意を表しながら立ち去っていた。すると突然声がした。

「ムイーヌッディーンを呼べ。」

廟の管理人がモスクのミフラーブ[60]のところに立って呼びかけた。

「ムイーヌッディーンはおられるか。」

この群集の中にいる全てのムイーヌッディーンという名前の人々が管理人の呼びかけに応えて口ぐちに名乗り出た。廟の管理人は困惑してどのムイーヌッディーンを預言者様はお探しなのかと尋ねると、預言者ムハンマドは仰った。

「ムイーヌッディーン・チシュティーよ、こちらへ参れ。」

ハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーは名乗り出ながら廟の管理人のところへ辿り着いた。廟の管理人は猊下に聖廟まで付き添い申し上げた。

「預言者様！ムイーヌッディーン・チシュティーが参りました。」

聖廟の扉がひとりでに開き預言者ムハンマド（アッラーの平安と恵みが彼の上にあれかし）の指示が下った。

「聖者達の枢軸[61]となるものよ。中へ参れ。」

フズール・ガリーブナワーズは感覚が研ぎ澄まされたような状態で聖廟の中へ入って行った。そして預言者ムハンマドの顕現に恍惚となった。気持ちが落ち着いてきた時に命令が下った。

「ムイーヌッディーンよ！お前は我らが教えを助ける者である。私はインドの地をお前に任せた。インドへ行け、そしてアジュメールに居を定めそこでイスラームの布教をせよ。神はお前にバラカをお与え下さるだろう。」

ハージャ・ガリーブナワーズは敬意を込めて聖廟の外へ出られた。猊下はある常にない精神状態にあられた。研ぎ澄まされた感覚と興奮が心に安らぎをもたらすと預言者ムハンマドの命令を思い出した。しかしインドはどちらの方でアジュメールがどこにあるのか分からなかったので困惑してしまった。考え込んでいるうちに夕方になり日が沈んだ。イシャーの礼拝[62]の後、まどろむと眠ってしまわれた。夢の中でインド全体の地図とアジュメールの光景が猊下の目の前にあった。眠りから目覚めると神に感謝して跪拝した。そして預言者ムハンマドの廟に詣で、祝福と挨拶を送るとインドへ向けて出発された。

フズール・ガリーブナワーズはその旅の間にシリアにも行かれた。しかし、猊下が帰る途中にシリアに行かれたのか、行く時にそちらを通られたのか、正確な事は分からない。とにかくハージャ・ガリーブナワーズはこの旅の様子を自ら語っておられる。

———ある時シリアのとある街へ行った。そこでひとりの行者が洞窟に住んでおられた。この方の身体の肉と皮膚は干からびてしまって骨だけが残るばかりであった。この行者は長衣の上に座り、二匹のライオンが入り口のところに立っていた。私はこの方に会いに行ったが、このライオンのせいで中に入って行く勇気がなかった。行者は私を見て「来なさい、怖がらなくてもいいから。」と仰った。

それを聞いて私は中へ入り行儀よく座った。行者は話しだした。「お前が何かを望まない限り、何者もお前に望む事はないだろう。」また仰った。「心の中に神への畏れを抱く者は何者からも畏れられるだろう。」再び尋ねられた。「どこから来られたのか

な？」私は申し上げた。「バグダードからです。」行者は話しだした。「よくぞいらした。しかしダルヴェーシュの熱意がお前の内にも生じるようにダルヴェーシュに仕えているのがよい。」

また仰った。「私は何年もこの洞窟で過ごした。恐れている事がひとつある。」私は「それはどのような事でしょうか？」と尋ねた。その方は仰った。「礼拝である。礼拝をしても何ものも残らず、そして礼拝だけが私を責める機会にならないようにと、この恐れから泣くのである。それ故ダルヴェーシュよ、もし礼拝をしたのであれば、神の栄光に讃えあれ！素晴らしい事だ。さもなくば人生は無駄に過ぎるであろう。」この後語りはじめた。「義務の礼拝を完全に果たさない事に勝る罪はない。私の礼拝を神がお認めになったかどうかは私には分からない。」

そして私にリンゴをひとつ差し出して仰った。「礼拝の義務を果たすように努力せよ。さもなくば来たる最後の審判の日に恥じ入る事になろう。」

第8章

ハージャ・サーヒブ、師の下へ再び

預言者の宮廷を出てハージャ・ガリーブナワーズはバグダード・シャリーフにお戻りになられた。この時猊下の師であるハズラト・ハージャ・ウスマーン・ハールワニーもバグダードに滞在されていた。師の御前に伺候するとガリーブナワーズは預言者ムハンマドから下された命令を猊下にお知らせになった。有頂天になった猊下の口元に微笑みが浮かんだ。それから猊下は「これから私はモスクに籠る事にする。部屋の外には出ない。」と仰った。

ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズは毎日朝になると師の下に出向いた。そして霊的な教えで溢れんばかりになって戻るのであった。この日課は28日間続いたのであった。この時に師の語った事全てを解釈して書き留められた。このようにして28日間で28章から成る一冊の小冊子が編纂された。その小冊子はアニース・ル＝アルワーフと名付けられた。

最後の日にはハズラト・シャイフはハージャ・サーヒブに預言者ムハンマドのバラカをチシュティー教団に連綿と伝える祝福された杖と御衣を授けながら仰った。「受け取るがよい、これは私の形見である。我々がしてきた様にお前の手元に置いておくがよい。そしてお前の言葉をよく聞いて理解し、それに従って行動し、習慣とするようなよき者だと思う者に与えよ。」このように指示を与えた後、猊下は自らの弟子、ハズラト・ハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーに別れを告げた。そして自ら驚愕の状態に没頭された。

師と別れて猊下はバグダード・シャリーフを旅立たれた。そして旅の途中でバダフシャーン[63]、ヘラート[64]、サブザワール[65]にも立ち寄られた。バルフを通って猊下は完全なる聖者にして最も完全な行者、シャイフ・アフマド・ヒズルーヤの神聖なる

修道場に何日か滞在され旅の支度をされた。

ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズは旅をされる時はいつでも、様々な困難備えて弓矢と火打石そして塩の容器を携えるのであった。ひどくお腹が空くと森で鳥などを狩ってお召し上がりになるのであった。ある日、空腹が猊下をひどく苦しめたので獲物を探しに出ると前方に鷺を見つけた。猊下が弓に矢を番えて射ると鷺は地面に落ちてきた。猊下は鷺を屠るとそれを焼くようにと供の者に渡し、御自身は礼拝に没頭された。

猊下が礼拝されているすぐそばをひとりの有名な哲学者で医者でもある人の家があった。その私塾が流行っていて遠くから学生が教えを得ようとやって来ていた。この医者の名はズィヤーウッディーンといい自分の哲学の知識をひどく誇りにしていた。それ故、聖者を物笑いの種にするように語っていてその悪影響が人々に及んでいた。

ハージャ・サーヒブが礼拝をし、供の者が鳥を焼いているところをズィヤーウッディーンは通りかかった。彼の視線がハージャ・サーヒブに止まるといきなりそこで立ち止まってしまった。ハージャ・サーヒブが礼拝を終えると彼は猊下の御尊顔に哲学と知識に関する全ての事柄を忘れてしまうような真理の顕現を見た。そして挨拶をすると行儀よく座った。そうしていると供の者が鷺を焼いてハージャ・サーヒブの御前に差し出した。そこでフズールはその足の一本を敬意を込めてハキーム[66]にお与えになった。そしてもう片方の腿の肉をお召し上がりになり、残りを供の者に渡された。

ハキーム・ズィヤーウッディーンは一口目の肉を口に入れた時、偽りの覆いが切り裂かれた。そして真実と霊的認識の鏡が目の前に現れ、理性と哲学による彼の頭の中に満ちていた悪しき考えが全て抜け出ていった。気を失うような恐怖が心の中に広がった。ハージャ・サーヒブはもう一口分の肉を彼の口の中に入れた。この肉が喉を通るや否や動揺はおさまり意識が戻って来た。自分の過去の妄想を悔い、恥じた。そして悔悛し、許しを乞うと自分の全ての弟子と共にフズール・ガリーブナワーズの弟子の中に加わった。

ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズがサマルカンドを通りかかると、ハージャ・アブル＝ライース・サマルカンディーの家のすぐそばに建設中のモスクがあった。ひとりの学識ある者がキブラの方向に対して異を唱えていて、どう説明しても納得しなかった。そこで猊下はその者の首根っこを掴まえて「見よ、目の前に何があるのかを。」と仰った。その者はカアバ神殿を見て満足した。

ハージャ・サーヒブがバダフシャーンに御光来された時、そこで140歳の行者とお会いになられた。この行者はハズラト・ジュナイド・バグダーディー[67]の子孫のうちのおひとりであり、その片方の足が切られていた。尋ねるとお答えになられた。「ある時からモスクに籠って禁欲の修行に没頭していたが、ある日性欲に苛まれた。そして切られた方の足を前に出そうとすると不可視の世界より声がした。

『誓願せし者よ！誓いを忘れた時の約束はこうであったな。』

その声を聞くと恐れから動揺し、この時に足を切って投げ捨てた。この出来事があってから40年の時が過ぎ去った。そして来る最後の審判の日にダルヴェーシュ達の前に何と顔向けしたものかと悩んでいるのだ。」

その後ヘラートに着いてハージャ・ガリーブナワーズはハズラト・ウバイドゥッラー・アンサーリーの聖廟に詣でられた。この聖廟には神への畏れが降り注いでいたので猊下は非常に用心深くされていた。そこで猊下はかなりの長い間、禁欲の修行をして過ごされ、一晩中修行に没頭されていた。そしてしばしばイシャーの浄めからファジュルの礼拝を行うのだった。[68] ヘラートで猊下の名声が高まると人々は続々と猊下の下にやって来るようになった。猊下はそれでそこから立ち去られ、真っ直ぐにインドへ向かわれた。

第9章

ハージャ・サーヒブ、インドへの途上にて

ヘラートから出立されてハージャ・ガリーブナワーズはサブザワールに到着された。サブザワールの領主、ムハンマド・ヤードガールはひどく残虐にして圧制者、かつ行いの悪い人間でシーア派を信奉している十二イマーム派という名の敵であった。彼は街のそとにとても広い庭園を作らせた。ハージャ・サーヒブはこの庭園に入られ池で沐浴をされた。そして2ラクアの礼拝をしてクルアーンの朗誦に没頭された。とそこへ偶然、庭園の持ち主である領主が散策にやって来るところであった。庭師達は「もし領主様に見つかったらただでは済まないので庭園を出て行って下さい。」と頼み込んだ。猊下は「そのような事を恐れずともよい。」こうしているうちに領主がお越しになったとの知らせが来た。使用人達は行儀よく立ち上がった。

ハージャ・サーヒブの供の者は街の領主がファキールや聖者を良く思ってない事をどこかで聞いていた。害を受ける事もあり得ると予測して供の者は猊下に「庭園に止まらない方がいいでしょう。もし、差し支えなければ他の場所へ御足労願えますでしょうか？」と申し上げた。猊下は微笑みながら「恐れる事はない。どこかの木陰にでも座って神の力を見物していなさい。」と仰った。

領主が庭園に入って来ると猊下はクルアーンの朗誦に没頭されていた。猊下が近くにいるのを見て激怒し、自分の使用人達を叱りつけた。

「この乞食坊主を何故ここから追い出さなかったんだ。」

使用人達は皆、押し黙って震え出した。

ハージャ・ガリーブナワーズは目を上げて領主を見ると猊下の威厳を見るや否や震え上がって地面に倒れ込み意識を失ってしまった。ムハンマド・ヤードガールの使用人達はこれを見て非常にうろたえてしまい、とても丁重に許しを乞うた。

ハージャ・ガリーブナワーズは丁寧に御自分の供の者を呼んで「バスマラ[69]を唱えてこの者の顔に水を振りかけてやりなさい。」と命じられた。供の者が彼の顔に水

を振りかけてやると意識を取り戻した。そしてひどく恥じ入ると自らの非道に対する許しを乞うた。

猊下はこの事を見逃して仰った。「お前は私に許しを乞うているが、預言者ムハンマドの心を悩ませて、預言者の偉大なる血統を主張する事を好み、それに従わないのは本末転倒である。」

フズール・ガリーブナワーズは偉大なる教友（彼らに神の満足あれかし）の生涯をそこに居合わせた人々全ての涙を誘うような調子で語られた。ムハンマド·ヤードガールとその供の者達は涙を流しはじめた。ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズのこの教訓はサブザワールの領主、シャイフ・ムハンマド・ヤードガールに大きな影響を与えた。そして彼は今までの行いを後悔すると猊下の弟子達の中に加わった。

この時、シャイフ・サーヒブは自分の全てのものや財産をフズール・ハージャ・ガリーブナワーズに差し出したが、猊下はこれらのものを受け取る事なく仰った。「来るべき最後の審判の日に誰かがお前を訴える事のなきよう、これらを力ずくで奪って来た人々の下へ全て返して来るように。」そこで彼はフズールの命に従って本当の持ち主にこれらのものを返し、残ったものは全て貧乏人や生活に困った者に分け与えた。現世を放棄しハージャ・ガリーブナワーズとの交わりを選んだ。ハージャ・サーヒブは猊下を後継者に任じ、他国で宣教する事をお許しになった。しかし、猊下はハージャ・サーヒブとの別れに耐え切れず、常に猊下の下に侍っておられた。そしてハージャ・サーヒブがお亡くなりになった後も聖廟の墓守りとなって死ぬまで仕えておられた。猊下のお墓は聖廟のすぐ側、北西の方向に現在もある。ハズラト・シャイフル＝マシャーイフ・ムハンマド・ヤードガールの子孫は、今日までアジュメールの聖廟にいる。そしてハズラト・ガリーブナワーズの聖廟に仕える権利を持っていて彼らはシャイフ・ザーダーと呼ばれる。[70]

第10章

ハージャ・サーヒブ、インドの地にて

サブザワールを出発された猊下はガズニー[71]に到着された。そこでスルターヌル＝マシャーイフ・サイヤド・アブドゥル＝ワーヒドにお会いする栄誉を得られた。猊下に付き従うという栄誉はハズラト・クトゥブ・ル＝クターブ・ハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキー、シャイフ・ル＝マシャーイフ・ハズラト・ムハンマド・ヤードガール、そしてサイヤド・ルッ＝サーダート・ハズラト・ハージャ・ファフルッディーン・ガルデーズィーがそれぞれ得た。

聖者達のこの一団はこの時インドの国境に立った。デーヴカーマットの山々[72]が途中に立ちはだかっていた。しかしハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズの不屈の精神と決意はこの山々より堅固で強かった。猊下は神の名を唱えながら歩を進められた。そしてデーヴカーマットの山や谷、そして難所を通り抜けてインドの外れである

パンジャーブ地方に入られた。

ハズラト・ハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーがインドに入られた時、スルターン・シハーブッディーン・ムハンマド・ゴーリー[73]とその軍はプリトゥヴィーラージ[74]に負けてガズニーに向けて敗走していた。彼らはハージャ・サーヒブとその一行に言った。

「あなた方はもう先に行かない方がいい。むしろお戻りなさい。ムスリムの王が負けてしまったのです。あなた方は先に行かない方がいでしょう。」敬虔な者達の一行は「君は剣にかけて行ったが、我々は神にかけて行くのです。」と答えた。そうして敬虔な者達の一行はいつものように道を進みシャードマーンの城[75]やムルターン[76]を通ってラーヴィー川[77]のほとりに辿り着いた。

ラーヴィー川の向こう岸は首都のラーホールの街であり、その街のヒンドゥー寺院の高い金色の屋根飾りがこの街が立派で堂々としたものである事を遠くから示していた。ハージャ・ガリーブナワーズとその一行は河を越え、街の外で城壁の近くにあるハズラト・アリー・ビン・フジュウィーリー、ダーター・ガンジュ・バフシュ[78]で知られる光に満ち満ちた墓所に滞在された。

ハズラト・ダーター・ガンジュ・バフシュはその当時並ぶ者のない優れた学者であり、敬虔な禁欲家であり、偉大な達人のうちのおひとりであった。そこでフズール・ガリーブナワーズはここに籠られ霊的な徳とバラカを得られた。そして再びここから出立された。出発の際、猊下はハズラト・ダーター・ガンジュ・バフシュを讃えて以下の詩を読んだ。

ガンジュ・バフシュは優れたる学者にして　神の光の顕現
迷える者を導く　完全なる者達の導師

この詩はガリーブナワーズが何気なくお詠みになられたものであるが、猊下の御心情の表れである。そして今日まで人々が祈祷の文句として口にするほど人々に知られている。

そしてラーホールから出発してフズール・ガリーブナワーズはサマーナー（パティヤーラー）[79]に到着され滞在された。ここの人々は表面的には親切に感じられたが、内心では猊下に仇を成そうとしていた。実はデリーとアジュメールのヒンドゥーの王、プリトゥヴィーラージの母親が占星術に長けていた。彼女は自らの知識により息子の破局の原因となるであろう、このような姿かたちをした男がこの領内に入って来るであろう事を知らせていた。王はこの予言に従って絵師に似顔絵を書かせ、国境付近に配っていた。そしてこのような姿かたちの者をどこで見つけても直ちに殺すように命じていた。それ故ハージャ・ガリーブナワーズがサマーナーに到着されると王の手下達は猊下を似顔絵の男と見定め、足止めしようとした。ハージャ・ブズルグは出迎えた者の意図が邪なもので人々が猊下を欺こうとしているのを神秘的直感力で見抜いた。そこで猊下はその一行を連れ、敵供が気付きもしないうちに街から脱出された。

デリーへの到着

サマーナーを出てハージャ・ガリーブナワーズはデリーに御来光された。猊下はデリーに着くとヒンドゥーの王カーンデーラーオの宮殿のすぐ向かいに滞在され、布教を開始された。猊下の布教のやり方とそのお人柄はやって来た者達の多くがその敬虔な手において改宗してしまうほど心に残り、魅力的なものであった。徐々にムスリムの数は増えはじめ、しばらくするとデリーでイスラームが広まる事によって騒動が持ち上がった。ついには街の名士達の代表団が街のハーキム[80]であるカーンデーラーオの下へ行き、「あの罪深い（我ら神に非難を求める。）ムスリムのファキール供がやって来てからというもの我らの神がお怒りになっておいでになる。もしもすぐに彼らをここから追放しなかったら神々の怒りが王国の破滅の原因になるでしょう。」と訴えた。そこでカーンデーラーオは彼らファキール達を直ちにデリーより追放すべし、との命令を下した。しかしながらこの手段は何の効果もなかった。何故なら政府の代理人が命令を執行しようと猊下の下へ行くと、その折目正しさや気高い性格そして神を語る事によって直ちにイスラームを受け入れ、猊下の献身的な弟子の中に加わってしまうほどに影響されてしまうからであった。

カーンデーラーオの力が何ら及ばなかった事が分かると、彼はひとりの男を買収してサルカール・ガリーブナワーズを殺す事を承諾させた。そこでその男は信者になりすまして猊下の下に現れた。しかし猊下に彼の来意がばれてしまった。そこで猊下は仰った。

「そのような信者に成り済まして何になるというのだ。何故目的を果たそうとしない？」これを聞いて彼の身体に震えが走った。そして脇に抱え込んだ短剣が床に落ちた。このような勘の鋭さを見てその男は猊下の足元に倒れ込み改宗してイスラームに入信した。

ハージャ・ガリーブナワーズがデリーに十分にイスラームの種子を蒔いたのを感じた時、猊下は御自身の一番の後継者ハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーを布教と導きのためにそこに残した。そして自らは40人の献身的な弟子と共にアジュメールに向けて旅立たれた。猊下は布教と導きの任務をアジュメールに着くまでに何百もの人々が猊下の神を信ずる御手において改宗し、ムスリムになっていたほど見事に遂行された。

第11章

インドの王、アジュメールにて

アジュメールに到着して猊下は街の外にある一本の木の陰でお休みになられた。この時座ろうとすると何人かのラクダ曳きがやって来てひどく厳しい表情で言った。「ここから立ち去ってどこか他の場所に座れ。ここは王のラクダが座るところである。」

ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズは「ラクダはどこか他で座ってもよいでは

ないか。場所ならいくらでもある。」と言った。しかしラクダ曳きは主張し続け激昂した。そこでサルカール・ガリーブナワーズは丁重に仰った。「分かった、分かった。我々はここから立ち去るとするよ。お前さん方のラクダがここに座るといい。」こう言うと猊下とその弟子達の一団はアナーサーガルのほとりへ行き、ある山のところへ滞在された。明くる日の朝、ラクダ曳き達がどれだけやってもラクダは立ち上がらなかった。それはあたかも大地がラクダを掴んでいるかのように思われた。この様子を見てラクダ曳き達はとても困ってしまった。彼らのした事は何の効果もなかったので仕方なくプリトゥヴィーラージ王の宮廷のあるターラーガル[81]に行った。王は彼らの語る奇妙な出来事を聞くと驚きを露わにした。彼は自らの勇気をとても誇りにしていたが、ハージャ・ブズルグのこの最初の奇蹟に対して彼の勇敢さはまるで役に立たないでいた。止むを得ず彼はラクダ曳きに「これはそのファキールの呪いのせいであろう。行ってラクダが立ち上がるように許しを乞うのだ。」と命令した。そこでラクダ曳き全員がハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズの下に参上してこの上もなく丁重に許しを求めた。猊下は見事なまでに寛大さを示した。「行きなさい。神のお恵みによりラクダは立ち上がるだろう。」ラクダ曳き達が戻って来てみると彼らの喜びと驚きはこの上もないものであった。何故なら彼のラクダは皆立ち上がっていたからであった。

フズール・ガリーブナワーズと猊下の供の者は毎日アナーサーガルの近くのガート[82]で浄めや沐浴をしていた。ガートにはヒンドゥー寺院があったので寺院の寺僧にとってこの事は全くもって耐え難いものであった。ある日ハズラト・ガリーブナワーズの何人かの弟子達がアナーサーガルへ沐浴しようと出かけたが、バラモン達は彼らを引き止め暴行を加えた。弟子達は訴えようとサルカール・ガリーブナワーズの下へ参上した。猊下は全ての状況を聞くとひとりの献身的な弟子に「行って壺一杯に池の水を入れて来なさい。」と命令した。そこでその弟子はアナーサーガルへ行って壺を池に沈めて引き上げるとその全ての水が壺の中に入ってしまった。弟子は壺を持って来てハズラトの御前に差し出した。池の水が干上がった事を知ると寺僧やバラモン達は仰天してしまった。一方、街では泣き叫ぶ声が上がった。人々は水を渇望した。そしてムスリム達がガートで暴行を受けたために彼らの師が全ての水を消してしまった事が街中に知れ渡った。そこで街の人々の代表団がサルカール・ガリーブナワーズの下へやって来て伏して許しを乞うと猊下は見事な寛大さで壺の水を池に戻しに行かせた。すると池は元通り水で満ちた。非常に多くの人々が改宗し、この奇蹟の後アジュメールにイスラームがものすごい勢いで広がりはじめた。

シャーディー・デーヴの改宗

アジュメールのヒンドゥー寺院の指導者はジャードゥー・シャーディー寺院にいるシャーディー・デーヴであった。ヒンドゥーの優れた学者で寺僧達の長であり、全ての人々に彼の影響が及んでいた。彼がヒンドゥー寺院の荒廃する前兆を看てとると苛立ち、とても思い悩んだ。寺院の僧達も彼をハージャ・サーヒブに敵対させようと担ぎ上げた。そこで寺院にいる全ての者は一致団結してシャーディー・デーヴを猊下に

対抗馬として立てた。彼らは腹黒くハージャ・サーヒブに暴行を加えようとしていた。しかしハージャ・ブズルグは彼ら一同が震え出し、うろたえてしまうような一瞥を与えた。シャーディー・デーヴはその場でハズラトの足元にひれ伏しとても丁重に許しを求めた。ハージャ・ブズルグは彼に真実を説くと彼はすぐにイスラームを受け入れた。彼はムスリムとしてサアドと名付けられた。彼の連れていた多くの者も悔悛して改宗した。この出来事によって大騒ぎになりプリトゥヴィーラージも思い悩んだ。

ジョーギー・アジャイパールの改宗

アジュメールでもイスラームの隆盛によってラーエピトウラー[83]もひどく悩んだ。そこで彼はフズール・ガリーブナワーズに対抗するためにアジャイパール・ジョーギー[84]という名の一族が信仰するグルに相談した。アジャイパールはアジュメールのすぐ近くの森に住むインドで最強の魔術の達人であった。王は彼を呼んでハージャ・ブズルグに関する全ての状況を話して聞かせた。ジョーギーはフズールの当たり前の奇蹟を手品か魔法のようなものと考えた。彼は王にそのファキールとやらを追放してやりましょう、と請合った。そして鹿皮[85]に座り、自分の弟子達全員を引き連れてサルカール・ガリーブナワーズの滞在されているアナーサーガルへ向かった。悪魔達のこの軍勢は空飛ぶライオンにまたがり、大蛇の鞭を携えて凶暴な声を上げながらアナーサーガルのほとりにやって来た。フズール・ガリーブナワーズの新しくムスリムになった仲間達はこの悪魔達の軍勢を見て恐れをなした。この時猊下は御自身の指で城壁を描き、「危険だからこれより外に出てはいけない。」と仰った。

アジャイパールとその弟子達はその手からフズールに向かって勢いよく突進する魔法の蛇を放った。しかし、描かれた城壁の領域まで来ると全て燃えてしまった。この攻撃は効果がなかったので魔術師達は火の雨を降らせはじめた。しかし、この火はサルカールとその仲間達には何の効果もなかったどころか火は戻って行き、魔術師達は燃え尽きて灰になってしまった。彼らのどの術も効かないのが分かるとアジャイパールは空中から攻撃する事にした。そして空から攻撃しようと空に向かって飛んだ。フズール・ガリーブナワーズの視線が彼に止まるとあの不信心者を地面に降ろしてやれ、と御自身の靴[86]に指図した。靴は飛び上がり一瞬のうちにアジャイパールの頭の上まで到達し、連続して攻撃し始めた。しばらくするとどうなったであろう、靴はアジャイパールの頭を圧倒し彼はどうしようもなく下に降りてきた。結局驕れる者は罰を受け、アジャイパールの目からこの時覆いが取れていた。彼は魔術は無意味であり、今日まで魔術の獲得のために人生を台無しにしてしまった事を悟って両目に後悔の涙が溢れた。そして許しを乞うた。ハージャ・サーヒブは見事な寛大さでこれを許した。彼は心からムスリムになり猊下の弟子の中に加わった。ハズラトはアブドゥッラーという名前をお与えになった。彼の残った弟子も改宗し、池のほとりでこの出来事を見た全ての人々もイスラームに帰依した。

アジャイパールが改宗した後フズール・ガリーブナワーズに「フズール、御自身のいと高き位階をお示しください。」と願い出た。猊下は微笑みながら「目を閉じなさい。」

と仰った。目を閉じるやいなや彼は全ての覆いが消え始めるのを見た。魂が死から復活まで留まる世界[87]や天空の屋根、神の座[88]まで旅をさせた。彼が満足すると「目を開けなさい。」と指示された。目を開けるとフズールの足元に倒れこんだ。フズールはこの上もなく優しく彼を起こされ、彼を完全なる聖者の地位に引き上げるほどの恵みをお与えになった。この時彼はもうひとつ永遠の生命が欲しいと願い出た。そこでフズールは微笑んで神の宮廷に願い出ると彼の願いが受け入れられるという栄誉を得た。アブドゥッラーは生きていて道に迷った旅人達を導くと言われていて、アジュメールやその近辺の人々からアブドゥッラー・ビヤーバーニーの名で呼ばれている。

布教の速度

ジョーギー・アジャイパールがムスリムになるとすぐにアジュメール中が騒然となった。そして人々はハージャ・サーヒブに帰依している事を公然と表明した。シャーディー・デーヴとアジャイパールはムスリムになった後、ハージャ・ガリーブナワーズの下へ現れ街中に居を定めるよう懇願した。そこで猊下はアナーサーガルを出て今日ダルガーのある場所にやって来て住まわれた。この場所はシャーディー・デーヴの所有地のひとつであった。

この出来事は王に多大なる衝撃を与え、怒りの炎が胸の内で燃え上がった。一方、ハズラト・ガリーブナワーズは布教と導きの使命をさらに早められた。崇められる至高の神は一度一瞥を与えた者は愛の僕になってしまうような不思議な力を持つ眼差しを猊下にお与えになった。猊下の態度はやって来たもの皆が、猊下のもてなしや心からの同情、善意に影響を受け魅せられてしまうような寛大なものであった。人々は続々と猊下の下に参上してムスリムになるようになった。そしてこのように何千もの人々が不信仰の闇から抜け出してイスラームの光の中へやって来た。

プリトゥヴィーラージへイスラームの誘い

シャーディー・デーヴとアジャイパールがイスラームを受け入れた後、ガリーブナワーズはラーエピトゥラーの許に真実のお告げを送られた。

「イスラームを受け入れるがよい。これはお前にとっても良い事である。王権を失う事もなく死後も安らぎを得るであろう。さもなくばこの世でもあの世でも困難に直面する事をよく憶えておくがよい。そしてその時、お前にはどうする事も出来ないだろう。」

しかし彼は昔から冷酷であった。彼の心は変わらずハージャ・サーヒブのこのお告げを聞いて怒り狂った。彼は試しにひとりの男をハズラトの下に弟子入りさせようと送りこんだ。その男がフズールの下に現れて弟子入りを志願すると猊下は弟子に取り立てる事を拒まれた。理由を尋ねると猊下は弟子にしないのは三つの訳がある、と仰った。

「まず、お前の心は復讐心と穢れに満ちている。そしてお前の性質にはアッラー以外の全ての神の前に頭を垂れるであろうほどに多神教が染み付いている。三つめはお

前が信仰を持たぬままこの世を去る事が天の書板[89]に書かれているのを私が見たからである。」

これを聞いてその男は驚いた。そして王の下へ行って全ての様子を語った。

ハージャ・ガリーブナワーズとプリトゥヴィーラージとの確執は引き続き続いていたが、この時さらに緊張が増した。王のどんな力もハズラト・ガリーブナワーズに及ばない事が分かると彼は全てのムスリムを虐待するようになった。そして彼の宮廷にいるムスリムになってハージャ・サーヒブの弟子になった者がひどく苛められた。この弟子がハージャ・サーヒブの下へ参上して王がその虐待を思いとどまるよう勧告してもらえないか、と訴えた。ハージャが弟子を大切にするのは有名で、猊下はラーエピトウラーに彼に対しての虐待を思いとどまるよう勧告したが王は全く聞き容れなかった。そしてひどく立腹し、この国の主であり王である余の命令として一週間以内にその仲間と共にアジュメールを立ち去れ。さもなくば追放されるだろう、と命令を下した。この王の命令が我らがハージャ・サーヒブの下へ達すると猊下は御立腹されて仰った。「私はラーエピトウラーを生け捕りにしてイスラームの軍隊に引き渡した。」ハージャ・ブズルグの徳を代弁するお口からこの言葉を聞いて人々は驚いた。しかしハージャの口から出た事は起こらないはずがないと彼らは信じた。そしてとても不安気にその結果が訪れるのを待った。

第12章

シハーブッディーン・ムハンマド・ゴーリーへの吉報

フズール・ガリーブナワーズのお口からこの言葉「私はラーエピトウラーを生け捕りにしてイスラームの軍勢に引き渡した。」が出たその日、当時ホラーサーンにいたスルターン・ムハンマド・ゴーリーは夢の中で良きお告げを聞いた。それはどのようなものかというと、ひとりの敬虔な聖者が目の前に立ちこのように告げた。

「シハーブッディーンよ！至高の神はインドのスルターンの地位をそなたに授けられた。直ちにそちらに向かってその悪しきヒンドゥーの王を生け捕りにし、裁きを下すのだ。」

こう言うとその聖者は姿を消した。スルターンが夢から覚めると彼の心に不思議な気分が広がった。そして耳には不可視の世界からの声が繰り返し、繰り返し聞こえて来た。

「インドへ行け、成功がお前を待っている。」そこでスルターンは自分の夢を学者達に話して聞かせた。皆、口を揃えてスルターンを祝福し勝利の吉報を告げた。

シハーブッディーン・ゴーリー、インドへの遠征にて

スルターン・シハーブッディーン・ムハンマド・ゴーリーは一年前タラーイン（タラードリー）の戦場でプリトゥヴィーラージ王と戦い、屈辱的な敗北を喫した。そし

て辛うじて逃げ延びてガズニーに辿り着いた。復讐の炎が胸の中で燃えさかっていた。そして密かに戦闘の準備に取り掛かっていた。しかし、誰もがこんなに早く彼がインドへの遠征に出発するのは望んでいなかった。

スルターンの吉夢は彼の心の中に新たな熱意を生み出した。学者達から自分の夢の解釈を聞くとすぐに軍需品の目録を取り寄せて見た。そして軍営地で出陣の太鼓を打ち鳴らした。そして8日目に自ら旅の支度をして出発した。士官達はみんな何故これほどまでに準備を急ぐのか、そしてこの軍勢がどこに遠征しようとしているのかと驚いた。しかし誰にもスルターンに問いただすような勇気はなかった。この軍勢がペシャーワル[90]に着いて天幕を張ると王族のひとりの白い髭の老人がスルターンの下に参上して申し上げた。

「閣下、この遠征の荷は大きな戦のためのものとお見受けしましたが、どのような決意に基づくものなのか、お話いただけないのですか？」

スルターンはひとつため息をつくと答えた。

「ああ、そなたには私に何が起きたのか分からないのか。そなたは去年の敗北を忘れたのか？あの敗北がイスラームの名誉にとってごく当たり前の汚点だと思っているのならば、よく聞くがいい。私はあの日から今日まで服を換えていないし、宮殿でベッドに寝ていない。」

老人はこれを聞いてシハーブッディーン・ゴーリーの勇気を誉め称え、彼のために祈り、勝利の吉報を聞かせ仰った。「もしも閣下がそのようにお考えでしたら時に応じて適切に事を運ぶ必要がありましょう。猊下は将軍や士官達の行き違いをどうかお許しになって下さい。そして彼らが生命を賭けて戦うよう、そして過去の汚名を雪ぐよう将軍や士官達を謁見のために呼んで丁重にねぎらって下さい。」スルターンはこの貴重で時宜を得た助言にいたく喜んだ。そして軍を率いてムルターンに着くと庶民の謁見の式を催し、身分の高い者も低い者も合わせて全ての将軍や士官達を呼び、彼らの行き違いを許し、彼に向かって呼びかけた。

「ムスリム達よ！過ぎし年にイスラームの額に付いた汚名は誰の目にも明らかである。それ故、自らの剣という水で洗い浄めるのは全てのムスリムの義務である。」士官達は皆剣の柄に手を置いて頭を垂れた。彼らの様子はあたかも「我らは固く誓います。生命ある限り誓いを果たすでしょう。」と物語っているようだった。

ラーエピトウラーへのスルターンの言付け

ついにスルターン・シハーブッディーンはムルターンを出発し、ラーホールへ到着した。ここから知恵者で学識があり、演説において並ぶ者のない領主ルクヌッディーンを使者に立ててアジュメールのプリトゥヴィーラージの下へ送った。プリトゥヴィーラージに宛てて送った。プリトゥヴィーラージに宛てて送ったスルターンのメッセージはこのような内容であった。

「パンジャーブからホラーサーンまでの全てのムスリムの王である余が、兄の命によりインドに軍を率いてやって来た。それ故インドの王の中の大王たるプリトゥ

ヴィーラージよ。ここに記すが国土を戦争の目標にしないようイスラームに服従せよ。さもなくば戦いの準備をされたし。」

プリトゥヴィーラージはこの書状に目を通したが、彼はそれを全く問題にしなかった。そして辛辣な返答をした。何故なら彼は自分の勝利しか目に入らないほどに自らの力と勇気、そしてラージプート[91]の勇者達を信用していたからであった。だから戦いの準備にとりかかり、直ちにインドの諸王に宛てて回状を送った。僅かな日数で30万のラージプート達の軍勢が彼の旗の下に集結した。

スルターン・ムハンマド・ゴーリーは一方から前進し、もう一方からプリトゥヴィーラージの連合軍が動いた。そしてサラスヴァティー川[92]を挟んで両軍は陣を張った。丁度この時スルターンの下へラーエピトウラーの返答も届いた。その内容はこのようなものであった。

「ダルマ[93]のために余の下に空の星よりも多い軍勢が終結し、今もインドの隅々から軍が続々と集まっている。そしてこれらの軍のひとりひとりのラージプートの剣に、カーブル[94]からカンダハールまでが庇護を求めるほど勇敢である事は間者を通じてイスラームの将軍閣下なら御存知であろう。貴君らトルコの奴原やアフガーンの者供の若さに免じてここから立ち去るがよい。それが貴君らにとって最もよいだろう。さもなくば余の下にある数え切れないほどの物資や3000頭以上もの戦闘用の象を見るがよい。もしも余の助言を受け入れるならばよし、そうしなければ貴君らの兵士のひとりでも生きて帰る事はないだろう。」

スルターン・シハーブッディーンはこの書状を読んで気後れしてしまった。敵の多さと自軍の少なさを考慮した。そこで彼は策略を使って事を運びながら王への返事を認めた。

「陛下はとても御親切に良き助言をお与え下さいました。しかし、陛下も御存知の通り私は兄の命により出陣して参りました。向こうから命令があるまでは何もする事が出来ません。それ故向こうから返事が来るまでしばし猶予を戴きたい。」

王はこの弱気な返事を聞くととても喜んだ。彼の全軍において宴が催され、歌や踊りで大層盛り上がった。

決戦

シハーブッディーン・ゴーリーは敵を油断させて十二分にこれを利用した。夕方、出陣の準備を整える命令を下した。天幕はそのままにしておいて夜のうちに何マイルも迂回して全軍共に河を渡った。この時ヒンドゥーの王は正気に戻り彼の陣中は大騒ぎになった。とにかく王は冷静になった。そしてひとつの部隊を直ちに編成し、その向かいに移動させ残りの部隊も集めて戦場に終結させた。

ヒンドゥーの王の軍には3000の象と30万の騎兵、そして数え切れないほどの歩兵がいた。一方、スルターン・シハーブッディーンの軍勢はたった12万であった。[95]そのためヒンドゥーの王は自らの勝利を完全に信じきっていた。だから彼は陣形に特に注意を払わず全軍に一斉に攻撃を仕掛けるよう命じた。スルターンはそれとは逆に

戦略によって事を進め、軍を四つの部隊に分けた。そしてそれぞれの部隊にそれぞれの司令官を定め順番に戦うよう命じた。ラージプートはスルターンの軍が浮き足立つほど勇敢に戦った。この時スルターンは計略を巡らせた。即ち敗勢を装って後退した。ラージプート達は追撃した。スルターンが彼らの隊列が乱れているのを見ると二番目の疲れていない小隊に攻撃させた。しかしヒンドゥーの王の軍勢は数えきれないほどでスルターンの策は効果がなかった。戦い続けて昼になり太陽が頭上に来た。夏の頃で戦闘は長引いていた。プリトゥヴィーラージ王は150人の王達を連れて戦列を離れ一本の木の下の陰で決戦を挑もうと決意した。そして全員剣の柄に手を置いてダルマと国のために討ち死にする事を誓った。それぞれシャルバット[96]の杯を干し、トゥルシー[97]の葉を口にした。そしてサフランのティーカー[98]を額に描き意気を取り戻すと戦場に戻った。

もう負け戦になっていた。ヒンドゥーの王の軍は朝から戦い続けて疲れきっていた。スルターンはこの機を見抜いてまだ戦闘に加わっていなかった私的な奴隷である1万2千の勇敢な剣士達を連れて陣を離れた。そして一瞬のうちにヒンドゥーの王の本隊に突入する勢いで攻撃を仕掛けた。スルターンの他の士官達もこの光景を見て勢いづいた。彼らも左右から突入してヒンドゥーの王の軍に襲いかかった。疲れていない部隊を相手にするのは王の疲れきった軍勢の成すところではなかった。

みるみるうち何千というラージプートが殺されヒンドゥー王の軍はパニックに陥った。一方、王が非常に誇りに思っていた象は自軍に戻って来て何千もの兵を踏み殺した。ラージプートの勇者達は一致団結したが彼らに何が出来たというのだろう。現実となるべきガリーブナワーズの言葉は現実になろうとしていた。

もう陽が沈みかける頃、ヒンドゥーの王の軍は浮き足立ちスルターン・シハーブッディーンの軍は勝利した。カーンデーラーオは戦場で討ち取られた。多くのインドの王達もこの戦いで戦死し、何人かは逃げのびた。ラーエピトウラーもこの時に逃げようとしたがサラスヴァティー川の岸で捕らわれ討ち取られた。[99]

ついにシハーブッディーン・ムハンマド・ゴーリーは明白な勝利を手にした。そしてこの戦いによって北インドにイスラームの確かな支配が実現した。この後、サラスヴァティー、サーマーナー、クフラームそしてハーンシーのラージプートの王国[100]にもたやすく勝利を収めスルターンはアジュメールに向かった。途中何の抵抗も受ける事なく、むしろ戦死した王の息子達がスルターンを盛大に出迎え服従を受け入れた。スルターンはアジュメールに到着すると、その統治をプリトゥヴィーラージの息子のひとりに任命し忠誠の誓いを受けた。

シハーブッディーン、サルカール・ガリーブナワーズの足元に

シハーブッディーン・ムハンマド・ゴーリーがアジュメールに入ったのは夕方、陽が沈もうとしている頃でアザーンが聞こえてきた。スルターンは驚いてその声がどこからするのかを確かめた。人々は何人かのファキールが前からここに来ていて毎日5回このように呼びかけをしていると言った。スルターンはアザーンの聞こえる方に向

かうと人々が集まっていた。そこでスルターンは列に加わった。サルカール・ガリーブナワーズはイマーム[101]を務めておられた。礼拝が終わりスルターンの視線がサルカール・ガリーブナワーズの御尊顔に止まると彼の驚きようといったらなかった。彼はその夢の中で勝利と幸運のお告げをもたらしたのはこの聖者であると気付いた。すぐに足元に倒れこもうとしたがサルカールはスルターンを胸に抱いた。スルターンは感激のあまり涙を滲ませかなり長い事泣いていた。サルカール・ガリーブナワーズは祝福を与えて座るように言った。スルターンは一方に畏まって座った。涙がある程度おさまると崇敬と敬愛を示す奉納の金品を差し出すと弟子入りを求めた。サルカール・ガリーブナワーズはスルターン・シハーブッディーンに弟子入りの栄誉を与え、弟子達の中に加えられた。

何日かアジュメールに滞在した後スルターン・シハーブッディーン・ムハンマド・ゴーリーは自ら出向いてデリーを攻め落とし、忠実な奴隷軍人[102]であるクトゥブッディーン・アイバク[103]をインド諸国の副王に任命しガズニーに帰っていった。クトゥブッディーン・アイバクは残った国を驚くべき早さで攻め落とし、あっと言う間に北インドにおけるイスラームの支配が確立した。

ハリーラージ[104]というひとりの王がアジュメールからプリトゥヴィーラージの息子を追い出した。彼はクトゥブッディーン・アイバクに訴え出るとクトゥブッディーンはハリーラージ王に攻撃を仕掛け彼を殺した。Kolā[105]は再びアジュメールの王になったが、彼と共に非常に敬虔な聖者であったサイヤド・フサイン・サーヒブを総督代理に任命して送った。

ミーラーン・サイヤド・フサイン・マシュハディー[106]は最初からサルカール・ガリーブナワーズに帰依していて、その殆どの時間をサルカール・ガリーブナワーズの下で過ごしていたほどに傾倒されていた。猊下は布教において顕著な貢献をされた。

第13章

御結婚と御子様方

ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズは苦難の少年時代を過ごされ、若いうちは学問を求め、神を探求し、清貧の人生を送られた。この時猊下の御歳は59歳になっていた。アジュメールは終の棲家になり布教の活動も最高潮に達していた。そんなある日猊下の夢の中に預言者ムハンマドが現れるという栄誉を得た。預言者ムハンマドは御言葉を賜れた。

「ムイーヌッディーンよ！お前は神の命令を熱心に遂行した。しかし、私のスンナ通りに行動しないとはどういう事だ？」そこでこの夢を見た後相次いで二度御結婚された。

当時、アジュメールにはひとりの敬虔な聖者サイヤド・ワジーフッディーン・マシュハディーが住んでおられた。ある日、ハズラト・ハージャ・ワジーフッディーン・マシュ

ハディーは夢でイマーム・ジャアファル・サーディク[107]を見た。「ワジーフッディーンよ、お前の娘をハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーに嫁がせよ。これは預言者ムハンマドの御言葉である。何故なら彼は神の御前に参じた者であり、預言者ムハンマドの愛でる者のうちのひとりだからである。」と仰った。

サイヤド・サーヒブが夢から覚めるとその喜びといったらなかった。フズール・ハージャ・ガリーブナワーズの下へ参上すると自分の夢について語った。ハージャ・ブズルグは「私も晩年を迎えて、もう結婚の必要はないけれど預言者ムハンマドの御言葉や高い階梯に達したイマームの御命令には従わねばなるまい。それ故、この結婚は喜んで受けるとしよう。」と仰った。これを聞いてサイヤド・サーヒブはとても喜んでハズラト・ガリーブナワーズと自分の幸運な娘を結婚させた。この奥方様はビービー・イスマットというお名前であった。

フズール・ガリーブナワーズは二度御結婚された。この二度目の御結婚は喜んでイスラームを受け入れた、あるヒンドゥーの王の娘とされた。この奥方様のお名前はビービー・ウンマト・アッラーであったと、しばしば人々は伝記に記している。

ふたりの奥方様の間に三人の御子息とひとりお嬢様、全部で四人のお子様がお生まれになった。その御尊名は以下の通りである。

(1) ハズラト・ハージャ・ファフルッディーン、(2) ハズラト・ハージャ・フサームッディーン、(3) ハズラト・ハージャ・ズィヤーウッディーン・アブー・サイード、(4) ビービー・ハーフィズ・ジャマール（彼女に神の御慈悲あれかし）

ハズラト・ファフルッディーン

猊下はフズール・ガリーブナワーズの御長男であられた。マーンダルという村で農業を営んでおられた。猊下はとても偉大な聖者で顕教的、秘教的諸学の素晴らしい学者であられた。フズール・ガリーブナワーズがお亡くなりになられた20年後、アジュメールより40マイル離れたサルワールの村にて神の許に合一された。お墓はその村の、ある池のほとりの広々とした場所にある。毎年シャアバーン月[108]の3日から6日までよく準備された猊下のウルス[109]がサルワール村において催される。猊下には5人の御子息がおられ、中でもハズラト・ハージャ・フサームッディーンは愛に悩むとても秀でた聖者にして神を識るスーフィーであられた。猊下のお墓はサーンバルにあり、毎年ラジャブ月[110]の13日と14日にウルスがある。

サルカール・ガリーブナワーズはハズラト・ハージャ・ファフルッディーンをこの上もなく可愛がっておられた。猊下は農業を営んでおられたが、ある時領主が占有する農地に言いがかりをつけた。フズール・ガリーブナワーズは農地に関する命令の証言のために自らデリーへ行かれ、スルターン・シャムスッディーン・イルトゥトゥミシュ[111]から勅許を得てアジュメールに戻って来られた。

ハズラト・ハージャ・フサームッディーン

猊下はフズール・ガリーブナワーズの二番目の御子息であられる。神秘的直観力と

奇蹟を現す力を持つ秀でた聖者であられた。猊下はハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズの祝福された魂を完全に受け継がれた。極度に厳しい苦行をされ45歳の時に人々の前から姿を消しアブダール[112]の中に加わられた。

ハズラト・ズィヤーウッディーン

猊下はハージャ・ガリーブナワーズの一番下の御子息で非常に敬虔な聖者であられた。猊下は50歳の時に亡くなられ、そのお墓はアジュメールの聖廟の脇、サーヤーガートの基台にある。猊下のウルスは毎年ズー・アル＝ヒッジャ月[113]の13日にある。

ハズラト・ビービー・ハーフィズ・ジャマール

猊下はサルカール・ガリーブナワーズの長女であられる。非常に敬虔な禁欲家にして貞節な女性であられた。ガリーブナワーズは猊下に後継者の証である御衣を賜れた。何百もの女性が猊下を通じて神に接近出来る地位を得た。カーズィー・ハミードゥッディーン・ナーゴーリー[114]の御子息であるラザーウッディーンと御結婚された。御嬢様は非常に困難な修行をされた。猊下のお墓はハズラト・ガリーブナワーズのお墓の足元にある。

ここでこの事について述べておくのも興味深いであろう。ある日フズール・ガリーブナワーズは側近やごく親しい友人との集まりでこう仰った。「初めのうちは心に望んだものは何であれ、すぐに叶ったものであった。それが子供が生まれてからというもの祈る事なしには意図したものを得る事が出来なくなった。」この集まりに参加していたハズラト・ハージャ・ハミードゥッディーン・ナーゴーリーは申し上げた。「ハズラト、そうでなくてはなりません。何故ならハズラト・イーサー[115]がまだ生まれていなかった頃、ハズラト・マルヤムには祈らずとも天国の果物が届けられていました。ところがハズラト・イーサーの御誕生の後、ハズラト・マルヤム[116]には木からナツメヤシの実を採って食べるようにとの命令が下り、祈りや行いなしには何も手に入る事はありませんでした。」これを聞いてサルカール・ガリーブナワーズはとても喜んだ。

第14章

サルカール・ガリーブナワーズのデリーへの旅

ある時、ハズラト・ハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーはアジュメールに行く許しを求めた。ハズラト・ガリーブナワーズはこの願いに答えてこのように記された。

「例えどんなに遠くにいても全ての愛する者は愛される者と共にいる。それ故お前のいる必要のあるその地にいるがよい。何日かしたら私の方からデリーに行こう。」

この返事の何日か後にサルカール・ガリーブナワーズはデリーにお越しになられた。

ハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーは猊下の御到着をスルターン・シャムスッディーン・イルトゥトゥミシュに伝えようとしたが、フズール・ガリーブナワーズはお止めになった。

どのようなかたちでも猊下の御到着の知らせを隠しおおせるものではなかった。結局デリーの人々に知れ渡ってしまい、全てのウラマーやスーフィー行者、貴族たち、そしてスルターン・シャムスッディーン・イルトゥトゥミシュ自らが猊下の下に伺候した。この時バーバー・ファリードゥッディーン・ガンジェ・シャカル[117]は身体に滴る血の滴が目に入らないほど、そして衰弱しているせいでフズール・ガリーブナワーズの下に伺候出来ないほどの苦行をされていた。ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズはハズラト・ハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーに尋ねられた。

「お前の弟子達の中にまだ恩恵を授けていない者が残っていないか？」

クトゥブ・サーヒブは申し上げた。「40日間の勤行をしている弟子がひとり残っております。その者はマスウード、バーバー・ファリードゥッディーン・ガンジェ・シャカルです。」

これを聞いてサルカール・ガリーブナワーズは「行ってその者を見ようではないか。」と仰った。

バーバー・ファリードゥッディーンは敬意を示すために立ち上がれないほど衰弱していた。そして彼の目からは涙が流れた。ハージャ・ガリーブナワーズは「バーバー・バフティヤール！この哀れな奴をいつまで苦行させておくつもりだ。何かくれてやれ。」と仰った。クトゥブ・サーヒブは「フズール、猊下の御前で何を与えろと仰るのですか？」と申し上げた。

ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズは立ち上がった。バーバー・ファリードの片腕を自ら手に取られるとハージャ・クトゥブッディーンに仰った。「もう片方を持ちなさい。」この時、ふたりの達人がどのような恩恵をバーバー・ファリードに賜ったのかは神のみぞ知るところである。幸運にしてこのような機会を得るとはバーバー・ファリードはとてつもない幸運の持ち主であった。

デリーのシャイフル＝イスラーム、ナジムッディーンの手酷い応対

スルターン・シャムスッディーン・イルトゥトゥミシュはハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーにこの上ない崇敬と敬愛の念を抱いていた。スルターンとクトゥブ・サーヒブのこれほど深い関係を見て野心を持つ何人かの者の中に妬みの炎が燃え上がり、クトゥブ・サーヒブを追放しようとするようになった。ある時、ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズがデリーにお越しになられた時、デリーの人々は猊下の下に続々と伺候し、崇敬を示す奉納の金品を差し出した。そしてデリーのシャイフル＝イスラーム[118]であり、猊下の兄弟弟子でもあるシャイフ・ナジムッディーン・スガラーは来なかった。ある日ハズラト・ハージャ・ガリーブナワーズは自ら彼に会うためにその家に向かわれた。シャイフル＝イスラームが家の中庭に立ち、

外のテラスを作らせているのを見た。初めはハズラトの方を見ようともしなかった。そして会っても非常に無愛想だった。これに対してガリーブナワーズは「デリーのシャイフル＝イスラームの地位がお前をおかしくしている。」と仰った。これに答えて「私は客観的に見て何も変わってはいないが、不満はもちろんある。猊下の後継者がいるおかげでシャイフル＝イスラームである私の下に誰も尋ねに来ない。」と言った。ガリーブナワーズは彼を慰めながら「困る事など何もない。私がバーバー・バフティヤールを連れて行くから。」と仰った。

こうしてクトゥブ・サーヒブは自分のシャイフと共にアジュメールへ出発した。人々にこの知らせが伝わった時、彼らの悲しみは限りないものでデリーの街中がパニックに陥った。そしてあちこちで泣き叫ぶ声が上がった。街の全ての人々と共にスルターン・シャムスッディーン・イルトゥトゥミシュが猊下の後ろについて歩いた。シャイフ・クトゥブッディーンが歩いたところの土を人々はバラカの印としてもって行き、極度の不安から号泣するのだった。[119] ハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティーはこの光景を見て仰った。「バーバー・バフティヤール！お前はデリーに残れ。私はこれだけの人々が心を痛めているのは決してよい事ではないと思う。行け、私はこの街をお前に任せた。」そしてスルターン・シャムスッディーン・イルトゥトゥミシュはハージャ・ガリーブナワーズの幸運の御足に口づけし、ハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーと共に喜んで街へ向かった。一方、ハージャ・ガリーブナワーズはアジュメールに向けて出発した。

第15章

ハージャの合一

ヒジュラ暦633年が明けてすぐハージャ・ガリーブナワーズはこの年が最後の年になる事を悟った。そこで猊下は自分の弟子に必要な指導をし、遺言を残され、後継者に任ずるべき者にはその栄誉を賜った。そして同時にハズラト・ハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーをアジュメールに来るように呼びに行かせた。

フズール・ガリーブナワーズはある日、アジュメールのジャーマ・マスジド[120]にお越しになられた。側近や特に親しい友人もやって来ていた。猊下が死の国について話をされていると、突然シャイフ・アリー・サンジャリーに向かって彼にハージャ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーの後継者の免状を書かせた。クトゥブ・サーヒブもやって来ていてガリーブナワーズは自ら祝福された帽子をクトゥブ・サーヒブの頭に載せ、手ずからターバンを巻かれた。聖なる御衣を着せ礼拝用のござ、クルアーン、そして祝福された靴を賜って仰った。

この賜物は私の師達から綿々と私にまで伝わって来たものだ。そろそろ私の最期の時が来たようだ。これらの預かり物をお前に授ける事にする。最後の審判の日に私が私の師達の前で恥じ入る事のないよう、出来得る限り委ねられた義務を果たすよう

に。」

そして更にいくつもの教訓をお与えになり、猊下に別れを告げられた。

合一の数日前、猊下は自分の上の御子息ハズラト・ハージャ・サイヤド・ファフルッディーンに教訓をお与えになった。

「この世の全てのものは消え行くものであり、消滅するものである。常に神を喜ばせる事を求めているように。そして何かのものを信ずる事なく、苦難の時は不屈の精神の裾を手から放すでないぞ。」

ヒジュラ暦633年ラジャブ月の5日から6日になる夜、いつものようにイシャーの礼拝の後、猊下は御自分のお部屋に入られ、中から扉を閉め神の想起[121]に没頭された。一晩中預言者への祝福と唱名の声が聞こえていて、朝になる前に声がしなくなった。日が昇った後も扉が開かなかったので使用人達は扉をノックしたが、それでも何の返事もなかったのでいよいよ困惑した。ついには仕方なく扉を壊して中に入ったところ、猊下がすでに神との合一を果たされているのを見た。そして猊下の輝く額に緑に輝く文字が書かれていた。

「これぞ神を愛し、神の愛に死せる者也。」[122]

ハージャ・ガリーブナワーズの死の悲しい知らせはすぐに街の路地から郊外にまで広がった。愛の涙を流しながら、その愛しき者の亡骸の周りに何千もの人々が集まった。猊下の御長男であるハージャ・サイヤド・ファフルッディーンが死者のための礼拝を執り行った。猊下はお亡くなりになったその部屋に埋葬された。その時から猊下の祝福されたお墓は全インドの霊的な中心地になった。至高の神がお望みであったなら最後の審判までそうあり続けるだろう。猊下の祝福されたウルスは毎年ラジャブ月の第1日から6日までとても準備されて執り行われる。

訳　注

(1)　「ホラーサーン Khorāsān〔P〕」現在のイラン北東部の州名。

(2)　「サンジャル Sanjar」はスィジスターン（Sijistān）の綴り間違い。

(3)　「カンダハール Qandahār」アフガニスタン南部、アルガンダーブ川とシューラブ川の間に位置する町。

(4)　「スィジスターン Sijistān〔A〕」スィースターンのアラビア語訛り。

(5)　「ハージャ・ブズルグ khvājah buzurg」ムイーヌッディーンの敬称。この後に登場するサルカール・ガリーブナワーズ sarkār、ハズラト haẕrat、フズール huẕūr などの敬称も特に指定がない限りはムイーヌッディーンを指すものとする。

(6)　Mūsā Kāẓim（745?-804?）シーア派、12イマーム派の7代目イマーム。

(7)　Abū Muḥammad al-Ḥasan ibn' Alī Ṭālib〔A〕（625頃-70頃）第4代正統カリフのアリーと預言者ムハンマドの娘ファーティマの息子。

(8)　本訳稿において三人称として使われる Āp を全て「猊下」と訳し、特に指定がない限りはムイーヌッディーンを指すものとする。

(9) Sayyid al-Shuhadā' Abū 'Abd-Allāh (al-) Ḥusain ibn' Alī〔A〕(626-80) 十二イマーム派第3代イマーム。

(10) 「サイヤド sayyad」預言者ムハンマドの子孫を称する人々に対する一般的尊称。

(11) 「ハディース ḥadīth」預言者ムハンマドの言行を記録したもの。

(12) 「タタール人 Tātārī」ヴォルガ川中流域のタタールスタン共和国を中心にロシア連邦と中央アジア各地に住んでいるテュルク系民族。

(13) Mu'īzz al-Dīn Abū al-Ḥārīth Sanjar Aḥmad〔P〕(1084-1157) セルジューク朝第7代スルターン。(在位 1119-57)

(14) 「マシュハド Mashhad」イラン北東部ホラーサーン州の州都で、イラン第2の大都市。

(15) 「マクダム？ Maqdam?」不明。

(16) 「ニーシャープール Nīshāpūr」イラン東部ホラーサーン地方の都市。

(17) 1536年に初めてムイーヌッディーンの生涯をまとめたとされる *Sair al-'Ārifīn* には15歳の時に父が亡くなったとされているが、母親については何の記述もない。預言者ムハンマドが幼少期に両親を亡くしている事から、恐らくはその生涯を意識して後に付け加えられたものと考えられる。

(18) 「ダルヴェーシュ darvesh、スーフィー ṣūfī、ファキール faqīr」それぞれ語源も意味も違うがこの文脈においては同異義語として、神を求めて修行する行者を指すと考えられる。

(19) 「顕教的学問 'ilm-e-ẓāhilī」法学などウラマーの担う学問。

(20) 「ブハーラー Bukhārā〔P〕」ザラフシャン川下流域に位置する、ウズベキスタン共和国の都市。

(21) 「マドラサ Madrasah」おもにイスラーム諸学を対象とする寄宿制の高等教育施設。

(22) 「ウラマー 'ulamā」イスラーム諸学を修めた知識人。ウラマーは複数形で、単数形はアーリム。

(23) 「サマルカンド Samarqand」ザラフシャン川流域に位置するウズベキスタン共和国第2の都市。

(24) 「バルフ Balkh」アフガニスタン北部、ウズベキスタン国境近くに位置する町。

(25) 「ラクア rak'at」立礼・屈礼・平伏礼からなる礼拝の最小単位。

(26) 「キブラ qiblah」ムスリムの礼拝の方向。具体的にはマッカのカアバ神殿の方向。

(27) 「雌牛章 sūrah Baqarah」クルアーンの第2章で全体の12分の1を占める最長の章。

(28) 「クラーハ・エ・チャハール・トゥルキー kulāh-e-chahār turkī」P.M.Currie の記述にある "The four cornered cap was a symbol of the Chishtī's renunciation of a)this world, b)everything in the hereafter except for God, c)food and sleep except the essential minimum, and the desires of the self." に相当すると思われる。

(29) 「純正章 sūrah Ikhlāṣ」クルアーンの第112章。

(30) 「最高天 'arsh-e-mu'allā」クルアーンによれば、宇宙には7つの天と7つの大地が存在し、その7天の上にはそれを包含するクルスィー（足台）があり、その上には神のアルシュ（玉座）が位置するとされる。原文では 'arsh-e-mu'allā となっているので、ここでは天の上にあるとされる玉座を指すと思われる。

(31) 「大地の下界 taḥat al-tharā」(30) で述べたように天と同様に大地も7層あると考えられている。ここではその最下層の大地を指すものと思われる。

(32) 「偉大なる覆い ḥijāb-e-'aẓmat」神秘主義の観点から言えばヒジャーブは真実を覆い隠すもの全てを指す。しかし神が座するとされる玉座が見えているのに、これ以上何を隠す覆いがあるのかは不明。

(33) (17) で挙げた *Sair al-'Ārifīn* では2年半過ごしたとされている。

(34) 「霊的認識 ma'rifat」神についての認識、直感知。

(35) 「スィーウスターン？ Sīwstān?」ペルシャ東部、ホラーサーン地方南部の地域、スィースターン（Sīstān）の誤りと思われる。ただし、この前後に訪れた都市の名前がないので断定は不可能

(36) イスラームでは死者は墓の中でムンカルとナキールという天使に尋問と罰を受けると考えられている。

(37) 「バスラ Baṣrah」イラク南部の都市。

(38) 「神秘的直観力 Kashf」スーフィズムの用語で、神の知識が直接人間に開示されること。[『岩波イスラーム辞典』p.259]

(39) 「開扉章 Fātiḥa」クルアーンの最初の章。

(40) このエピソードは 1388 年に Amīr Khurd によって書かれたとされる *Sair al-'Auliyā* からの引用であろう。ただし、ここでは老人は息子が行方不明になってから 30 年間になると言っているが、*Sair al-'Auliyā* の方では 40 年となっている。また次のエピソードでは「アッラーに賛えあれ Al-ḥamd li-Allāh」を 5 回唱えるのに対して *Sair al-'Auliyā* では開扉章を 5 回唱えているなど細部に若干の違いが見られる。

(41) 「ヒルカーン Khirqān」記述から考えてアスタラーバード（現在のイラン、グルガーン）を指すと思われる。

(42) Abū al-Ḥasan Khirqānī（?-1033?）11 世紀前半まで生きたペルシャの神秘家を指すと思われるが特定は不可能。もしも作者がこの聖者を意図しているとするならばムイーヌッディーンは 1141 年に生まれたとされているので、この出会いには無理がある。

(43) 「バラカ barakat」本文では複数形の barakāt イスラームで、本質的には神に由来する聖なる力、恵みの意。

(44) 「マーズィンダーン？ Māzindān?」記述からみてカスピ海南岸の地域 Māzindarān だと思われる。

(45) 「アスタラーバード Astarābād」イラン、カスピ海の南東に位置する都市。

(46) 「スィルスィラ silsilah」道統。原義は鎖で、スーフィズムにおける師弟関係の系譜を意味する。タリーカ（スーフィー教団）の形成とともに、スーフィーにとって自らのアイデンティティを示すものとして重視され、やがてタリーカそのものをも意味するようになった。[『岩波イスラーム辞典』p.527] ここでは後者の意でつかわれている。

(47) Abū Yazīd (Bāyazīd) Ṭayfūr ibn Īsā al-Bastāmī〔A〕(?-874•77) 著名な初期のスーフィー。陶酔型スーフィーの代表。

(48) Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī（1111-1235）ムイーヌッディーンの後継者で後に登場するファリードゥッディーン・ガンジェ・シャカルの師。

(49) 「ハマダーン Hamadān」現代のイラン中央部に位置する街。

(50) 「タブリーズ Tabrīz」イラン北西部の都市で、東アゼルバイジャン州の州都。

(51) Abū al-Najīb' Abd al-Qāhir ibn 'Abd-Allāh al-Suhrawardī〔A〕(1097 頃 -1168) シハーブッディーン・スフラワルディーと並んでスフラワルディー教団の名祖とされるスーフィー。

(52) Muḥyī al-Dīn Abū Muḥammad 'Abd al-Qādir ibn Abī Ṣāliḥ al-Jīlānī〔A〕(1077/8-1166) 聖者として広く認められ、カーディリー教団の名祖となる。

(53) Awḥad al-Dīn Kirmānī（?-1238?）イランの神秘家。

(54) 「神秘的認識 'irfān」イスラームの神秘主義的、秘儀的思想。同語根の語マアリファと同様にイルファーンは一般に知識、認識を意味する語ではあるが、とくに神および実在についての直感的知識を指す。[『岩波イスラーム辞典』p.178]

(55) 原文では khānah-e-Ka'bah kī ziyārat とあり、この文面からではこれが大巡礼であるハッジ（ḥajj）なのか小巡礼のウムラ（'umra）なのかは判断出来ない。

(56) 「タワーフ ṭavāf」カアバ神殿を黒石の地点から左方向へ7回まわる儀式。

(57) 「不可視の世界 ghaib」原文では ghaib 人間の認識と力の及ばない世界、アーラム・アル＝ガイブ（'ālam al-ghaib〔A〕見えない世界）をさすと思われる。

(58) 「預言者モスク Masjid-e-Nabavī sal'am」マディーナにある、預言者ムハンマドによって建設されたモスク。なお、文中にある預言者ムハンマドの宮廷はこのモスクの中にあるムハンマドの墓を指す。

(59) 「ファジュルの礼拝 namāz-e-fajr」夜が白みはじめてから日の出前までに行う義務の礼拝。

(60) 「ミフラーブ meḥrāb」マッカの方向を示す窪み。

(61) 「枢軸 quṭb」聖者のヒエラルキーにおいて、頂点にいるとされる人間。ガウス（助け手）とほぼ同義。[『岩波イスラーム辞典』p.330]

(62) 「イシャーの礼拝 namāz-e-'ishā」日没後から（59）で述べたファジュルの礼拝までにまでに行う義務の礼拝。

(63) 「バダフシャーン Badakhshān」アフガニスタン北東部、タジキスタンとの国境近くに位置する街。

(64) 「ヘラート Herāt」アフガニスタン北西部の主要都市。

(65) 「サブザワール Sabzawār」同名の町がホラーサーンの東部と西部にあるが、この記述からはどちらとも特定出来ない。この次の章でムイーヌッディーンが立ち寄るサブザワールは、「真っ直ぐにインドへ向かわれた」という記述から東部にあるヘラートのサブザワールと呼ばれる町を指していると考えられる。

(66) 「ハキーム ḥakīm」医者、研究者、古代の賢者の意。ここではズィヤーウッディーンを指す。

(67) Abū al-Qāsim ibn Muḥammad ibn al-Junayd al-Khazzāz〔A〕(?-910) 著名な初期のスーフィー。

(68) 礼拝のための浄め（wuẓū）は、放尿、放便、放屁、睡眠、失神、陰茎に掌で触れた場合、欲望を持って女性に触れた場合等に失効する。[『岩波イスラーム辞典』p.199] ここでは生理現象を催す事も睡眠をとる事もなく修行に没頭する聖者を描こうとしたと考えられる。

(69) 「バスマラ basmala」"慈愛あまねく慈悲深きアッラーの御名によって" という句。

(70) 1536年に書かれた *Sair al-'Ārifīn* においてムハンマド・ヤードガールやその子孫がインドに来た記述はない。しかし100年以上後になって書かれた Sair al-Aqtāb はムイーヌッディーンと共にインドにやって来た事になっている。[『The Shrine and cult of Mu'īn al-Dīn Chishtī』p.146] 恐らくはこの記述は後代になってから作られた話である事はほぼ間違いがない。

(71) 「ガズニー Ghaznī」アフガニスタン東部の町、ガズナ朝の首都。ガズナともいう。

(72) 「デーヴカーマットの山々 Devqāmat pahāṛ」具体的にどこを指すのかは不明。

(73) Shihāb al-Dīn Muḥammad Ghorī (?-1206) ゴール朝のシャンサバーニー族の第四王子。

(74) Pṛthvīrāj (?-1192) 北西インドのラージプート諸王朝のひとつチャウハーン（チャーハマーナ）朝の王。在位1177-92年。

(75) 「シャードマーンの城 Qal'ah-e-Shādmān」現在のタジキスタン西部に位置するギサールにあたる。[『A History of Sufism in India vol.one』p.121]

(76) 「ムルターン Multān」パキスタンのパンジャーブ州中部、チナーブ川とサトラジ川とに囲まれた地域の南端部の都市。

(77) 「ラーヴィー河 Dariyā-e-Rāvī」パキスタン北部を流れるパンジャーブ五河のひとつ。

(78) Abū al-Ḥasan' Alī ibn 'Uthmān 'Alī Jullabī Ghaznawī Hujwīrī〔A〕(1009/10-1072,76?) ガズナ出身の神秘主義者。ダーター・ガンジュ・バフシュの別名で知られる。

(79) 「パティヤーラー Patiyālah」インド北部、パンジャーブ州南東端の都市。

(80) 「ハーキム ḥākim」地方長官、あるいは統治者の意。

(81) 「ターラーガル Tārāgarh」アジュメールのすぐ近くにそびえる山の名。

(82) 「ガート ghāṭ」川や池などの岸に主に水浴、沐浴、洗濯、水汲み、船着き場などの目的で設けられた場所。普通、石などで階段状になっている。

(83) Rāypithaurā (74) のプリトゥヴィーラージのペルシャ語ふうに訛った呼称。表記にぶれが生じる事になるが原文に従った。

(84) Ajaypāl Jogī Jaypāl とも呼ばれる。アジャイパールのエピソードに関しては、ここで訳出したエピソードからただ単にムイーヌッディーンの頭上に大岩を落としたとするものまでさまざまである。因みにムイーヌッディーンの廟からターラーガルに向かう山道の途中にはアジャイパールが落としたとされる大岩があり管理人がついている。しかし肝心の立て札にはターラーガルに埋葬されている後述する聖者ミーラーン・サーヒブが受け止めた事になっており伝承が錯綜している。

(85) Ajaypāl went flying along through the air on the skin of deer. [『The Shrine and cult of Mu'īn al-Dīn Chishtī』 p.76] とありただの鹿皮ではなく弟子達同様、空を飛んで行ったようである。

(86) ヒンディー語地域において靴は時に侮蔑的な意味を示すが、その靴によって異教徒を懲らしめる事で聖者のステータスをより高めようとしている事がうかがえる。なお、本訳稿に収録されていないエピソードの中にも異教徒を改宗させる時に靴が登場しているものがある。

(87) 「魂が死から復活まで留まる世界 'ālam-e-barzakh」クルアーンに3か所見える言葉で、そこでは、死者がこの世に戻るのを妨げているもの、淡水と海水が混じることをとめるもの、という "障壁" の意味。しかし、より一般的には、現世と来世との間にあるという意味から、個人の死後、最後の審判のために復活するまで魂がとどまる場所を意味する。[『岩波イスラーム辞典』 p.789]

(88) 「天空の屋根 Bāmhā-e-aflāk、神の座 'arsh-e-a'ẓam」天空の屋根はクルアーンで言及されている7層からなる天の一番上、神の座はそのさらに上に存在すると考えられている神の位置する場で光の玉座と形容される場所を指すと考えられる。[『岩波イスラーム辞典』 p.93]

(89) 「天の書板 lauḥ-e-maḥfūẓ」神がこの世に起こるであろう全ての事柄について最初から終わりまで書きつけた板。これに逆らう事は出来ないとされる。[『Feroz al-lughāt Urdū Jāmi'』 p.1168]

(90) 「ペシャーワル Peshāwar」ペシャーワル渓谷西端に位置するパキスタン北西辺境州の州都。

(91) 「ラージプート Rājpūt」西部および中部インドにいくつかの政権をうちたてた部族。

(92) 「サラスヴァティー川 Sarasvatī」インド北部、ヒマーチャル・プラデーシュ州南端のシルムル県のシワリク丘陵に発し、ハリヤーナー州北西境を南西流したのち、ガッガル川に合流してタール砂漠中に消失する。全長約 330km。[『南アジアを知る事典』 p.288]

(93) 「ダルマ dharma」インドの宗教、思想、ないし仏教の重要な概念で、仏教では〈法〉と漢訳される。このことばは、〈保つ〉〈支持する〉を意味する動詞の語源 dhr- から派生し、そうした作用を実体化した名詞で、〈保つもの〉〈支持するもの〉を原義とする。[『南アジアを知る事典』 p.438-439] 状況に応じてさまざまなニュアンスで用いられるが、この文脈では規範としてのダルマ、特にヒンドゥー教を指す。

(94) 「カーブル Kābul」アフガニスタン東北部にある同国の首都。

(95) 実際にはプリトヴィーラージの軍は総勢 30 万、うち象が 300 頭で騎兵の大部隊を抱えていたといわれておりこの記述は多少の誇張がある。しかし、シハーブッディーンの軍に関しては一般に言われている通り総勢 12 万と記述されている。おそらくはイスラームの軍がより不利な状況下で勝利する事により夢枕に立って戦いに導いた聖者の偉大さを強調する意図がある

ものと思われる。描写はともかく戦術に関してもほぼ定説通りであり、虚実巧みに織り交ぜて説得力を持たせるよう配慮しているのがうかがえる。

(96) 「シャルバット sharbat」濃縮した果汁を薄めた飲み物、或いは水に砂糖、ハッカ、ウイキョウなどを加えて作った清涼飲料。[『ヒンディー語＝日本語辞典』p.1258]

(97) 「トゥルシー tulsī」シソ科カミメボウキ【*Ocimum sanctum*】。ヒンドゥー教徒にとってはヴィシュヌ神の配偶神ラクシュミーの化身として神聖視される植物。[『ヒンディー語＝日本語辞典』p.609]

(98) 「ティーカー ṭīkah」ヒンドゥー教徒が額、腕、胸部などに白檀、ウコンの粉、石灰、サフラン、粘土などを用いて描く宗派標識や宗教上、信仰上のしるし、あるいは装飾的なしるし。[『ヒンディー語＝日本語辞典』p.535]

(99) プリトゥヴィーラージがサラスヴァティーでシハーブッディーンに捕まったのは事実であるが、両方の名前を刻んだ貨幣が残っている事からこの戦いの後にもプリトゥヴィーラージがアジュメールを統治していた事が明らかになっている。この記述にあるようにその息子が後を継いだのはプリトゥヴィーラージが陰謀のかどで殺された後の話になる。[『中世インドの歴史』p.66-67]

(100) 原文ではサラスヴァティー、サーマーナー、クフラーム、ハーンシーは王国 siyāsat となっているが、どれも要塞であり王国ではない。

(101) 「イマーム imām」ここでは集団礼拝の時に最前列で礼拝の手本を示す人物の意。

(102) 「奴隷軍人 ghulām」本来、少年を意味する語。しばしば、奴隷の意味で使われた。広く前近代の中東イスラーム世界で使用された語だが、地域・時代によってその意味は微妙に異なる。ここでは 9 世紀半ば以後、軍事的に重用された軍事を専門とするトルコ系のグラーム集団の意。[『岩波イスラーム辞典』p.335]

(103) Quṭb al-Dīn Aibak（?-1210）中央アジア、トルコ系の奴隷出身で奴隷王朝の創始者。

(104) 「ハリーラージ Harīrāj」はプリトゥヴィーラージの息子のおじ、ハリラージだと思われる。

(105) 意味不明。

(106) Mīrān Sayyad Ḥusain Mashhadī（?-1203?）ミーラーン・サーヒブ Mīrān Sāḥib の名で知られるクトゥブッディーン・アイバクの時代にターラーガルの城の城主だった人物。

(107) ʻAbū ʻAbd-Allāh Jaʻfar al-Ṣādiq ibn Muḥammad al-Bāqir〔A〕(699•702-705) 十二イマーム派の第 6 代、またはイスマーイール派の第 5 代イマーム。

(108) 「シャーバーン月 Shaʻbān」ヒジュラ暦の 8 月

(109) 「ウルス ʻurs」聖者の命日に聖者廟（ダルガー）で行われる祭礼。

(110) 「ラジャブ月 rajab」ヒジュラ暦の 7 月

(111) Shams al-Dīn Iletutmish（?-1236）北インドの奴隷王朝第 3 代の王（在位 1211-36）。

(112) 「アブダール abdāl」聖者（ワリー）のヒエラルキーのひとつ。イスラームの聖者理論ではクトゥブを中心にした、一般の人々が知り得ない聖者の一団が世界の秩序を維持していると考えられた。アブダールはこのクトゥブを補佐する聖者たちのヒエラルキーのひとつ。[『岩波イスラーム辞典』p.444]

(113) 「ズー・アル・ヒッジャ月 ẕū al-Ḥijja」ヒジュラ暦 12 月、巡礼月。

(114) Qāẕī Ḥamīd al-Dīn Nāgaurī（1192?-1274）ムイーヌッディーンの後継者のひとり。その神への絶対帰依から隠者たちの王 Sultān al-Tārikīn と呼ばれた。

(115) Haẕrat ʻĪsā クルアーンに登場する預言者、使徒のひとり。イエス・キリスト。

(116) Haẕrat Maryam イーサー（イエス）の母、マリア。

(117) Bābā Farīd al-Dīn Ganj-e-Shakar (1175-1265) クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーの後継者で、ニザームッディーン・アウリヤーの師。

(118) 「シャイフ・ル＝イスラーム Shaykh al-Islām」"イスラームの長老" の意で高位のウラマーに対する尊称。

(119) 聖者は特別のバラカに恵まれており、自らのバラカを人々に伝える事が出来るとされている。

(120) 「ジャーマ・マスジド jāmā masjid」金曜のモスクの意。金曜日に集団礼拝が行われるモスク。

(121) 「神の想起 zikr」アラビア語の動詞 dhakara は一般的には "話す" "述べる" という意味で、その動名詞ズィクルは "話" "記述"。クルアーンにおいてはそのほかに "思い出す" "想起する" の意で使われ、さらには "神の想起"、すなわち礼拝において "神の名を唱えることにより神を賛美する事" をさすようになる。そこからスーフィズムの用語として、日本の念仏や唱名のようなシャハーダや神の名の連祷、およびそれを行うことによる修行法を意味した。[『岩波イスラーム辞典』p.521-522]

(122) この訳は [鈴木　斌：1976「ムイーヌッディーン・チシュティー廟について — 沿革と現状 —」『東洋文化研究所紀要』69,p.5] より引用。

参考文献および引用文献

荒　松雄

1989,『中世インドの権力と宗教 — ムスリム遺跡は物語る —』岩波書店

Brill

Encyclopaedia of Islam, Brill, Raiden

チャンドラ，サティーシュ

1999,『中世インドの歴史』(小名康之・長島弘訳) 山川出版社

Currie,P.M.

(ed.)2006(1989), *The Shrine and Cult of Mu'īn al-Dīn Chishti of Ajmer*, O.U.P., NewDelhi

Dehlvī,'Abd additḥaqq Muḥal-H

A.H.1414, *Akhiyārbār al-Ah* mūan MaḥTranslated into Urdu by Maulānā Subhd aḍīib Ustād al-ḤSāhth Dār al-Ilūm Karāchī, Adabī Duniyā,354-355etc,Dehlī

Fīroz al-Dīn, Al-Hāji Mauluvī?, Fīroz al-lughāt Urdū Jāmia, Nayā idīshan, Ferozsons Limited, Lāhaul

加賀谷　寛

2005,『ウルドゥー語辞典』大学書林

古賀勝郎

2005,『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館

辛島　昇他監修

2002,『南アジアを知る事典』平凡社

大塚和夫他編

『岩波イスラーム辞典』岩波書店

Oxford

1908, *The Imperial Gazetter of India*, New Edition, Oxford

Rizvi,Saiyid Athar Abbas

1978, *A History of Sufism in India Vol. I*, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt Ltd., New Delhi

鈴木　斌

1976,「ムイーヌッディーン・チシュティー廟について ― 沿革と現状 ―」

『東洋文化研究所紀要』69,1-54

[参考映像資料]

Jāved,Saiyid

2004, *Dāstān-e-Ajmerī Khwājah*,Ambey Series, Shubham Audio Video PVT.LTD., Delhi?

2006, Karishma-e-Ajmer ki Ziyarat Khwaja Garib Nawaz, Munbai, Music Track, Munbai